

Li-tweet

2013/winter/No,6

特集 It's a small world !



新嶋樹 (イコ) / 6 / 3

深街やか / あんな

常磐誠 / 日居月諸 / 小野寺那仁

...

『Li-tweet』(2013 冬号)

園(その)——そこはどんなところ。日常から区切られた、小さな世界。眠る動物、踊る植物、花々、松や躑躅、きらびやかな回転木馬。誰もが一度は行って、一度は帰る。振り返れない愛おしさ。廃れてしまうから美しい。

思い出をとじこめたひとつの空間、日常から区切られたちいさな空間。

園(その)は、植物園や動物園、公園、遊園地とさまざまな形で存在しています。

冬号ではそんな小さな世界(『It's a small world』)にひかりをあてて、小説や詩あるいは短歌俳句で表現をする特集を組みたいと思います。誰も描いたことのなかったようなあなたの園が作品の中に現れることを編集長として願っています!

目次

『Litweet』(二〇一三 冬号)

() 内の数字は四〇〇〇字詰め原稿用紙に換算した枚数です。

・特集 「It's a small world !」

小説「斜面のようにくだらかな暮らし」(二七枚)：崎本智(6)

七

詩「竜のなみだ」：新嶋樹(イコ)

二十七

詩「たとえば庭で、落下して」：深街ゆか

二十九

詩「鳥の鳴く街」：る

三十二

・自由投稿

詩「詩4篇」：る

三十五

小説「消灯」(五〇枚)：新嶋樹(イコ)

四十五

小説「エターナル」(一七枚)：あんな

八十

・連載

小説「I believe your brave heart」(第三回・最終回)(五〇枚)：常磐誠

九二

小説「書かれなかった寓話」(三六枚)：日居月諸 一二九

小説「合同教会の人びと」(二五枚)：小野寺那仁 一六一

記録 一七六

編集後記 一七六

特集

「It's a small world !」

斜面のようになだらかな暮らし

崎本 智（6）

あの日から連絡がとだえて久しくなる、とあなたは予感のように考えていた。

勤めているK市の中心から帰宅して衣類をハンガーにかけ、部屋着に着替えると矢継ぎ早に湯を沸かす。錫製のちろりと、とつくりを鉛のような色をした水のなかに沈めて爛酒をつくる。ときどき冷蔵庫から漬物やつくだ煮をだしてつまむため、そのたびに台所に白いひかりがひろがる。食器棚のあたりに気配を感じた。そこにいたのか、とあなたはパスピエをみつめる。パスピエはストリングチーズを噛みさいて繊維のよくな細さにしてから食べている。パスピエに、きょう電話は鳴らなかつたか、と尋ねようかと考えたがパスピエはそっぽをむいてしまった。しばらくしてあなたはわたしに携帯の番号しか教えていなかったことに気が付く。てきとうにつまんでいるうちに腹はふくれてもうつまみなどはいらなから酒を飲んでしまおうと思った。冷蔵庫のそばでパスピエはちいさくふるえている。あたためられた酒はワングリ型の器にそそがれる。あまやかな匂いが湯気によって鼻にからがる。雪国でつくられたきめ細かい優しい口当たりの酒があなたの好み。つまみがなくても酒は旨かつたし、それだ

けで連絡がないことをあたまの片隅におしやれるような気がした。あなたはオーディオの電源を入れる。温まった酒を飲みながら午前二時までドビュッシーを聴くのがいつものまにかできた日課だった。あわただしい職場から解放されても興奮はさめることなくあたまは熱に浮かされていた。それでも時間の経過とともに爛酒は癒し惑わすように眠りへといざなった。

ざざ降りの雨が降った日で、〇駅の改札を出たところで三人は待ち合わせをしていた。人気がないずいぶんと暗い駅だった。あなたは一番に到着して文庫本を読んでいった。そこへわたしとカミヌマがあらわれてカミヌマはあなたとわたしを簡単に紹介した。まだ夜にしては早い時間帯だったのに通勤客はほとんどおらず閑散とした場所であたしたちはお互いに自己紹介をした。相手の名前さえ忘れてしまいうなそっけないものだった。どっか店にいこうよ、とカミヌマがうながしてわたしはそれのかと話をすることなく黙々と歩きつづけた。どうして〇駅のようなさびれた駅を選んだのか。一向にてきとうな店はみつけれず坂をのぼりはじめて、もしかして何かの罠にはめられているのかもしれない、とあなたも予感し始めるころ、偶然ピアレストランのよなものが住宅地のなかに不釣り合いに建っていた。傘をさしながら歩いてきたからさきほど紹介されたわたしの顔をあなたはすっかり忘れてしまっていただろう。なぜ

わたしとあなたがひき会わされたのかカミヌマの真意はいまになってもつかめな
ままだ。お互い独りものだったからひつつけようとしたのだろうか。カミヌマは笑う
ときに金歯をみせて笑うにぎやかな男でそういう気をまわす奴にもわたしには思え
なかった。とりあえずハイネケン、とカミヌマがさきについてあなたとわたしもそれ
を注文することにした。

マレーシアから帰国したばかりという女は、クアラルンプールで買った菓子をあな
たとカミヌマに渡した。だだ甘いけど、気に入ったの、とわたしはあなたが甘いもの
をいっさい食べないことを知らないで渡した。それからあなたをほったらかしにして
カミヌマにクアラルンプール滞在中の話をしていた。長期滞在中のホテルに巨大クモ
が出たことをわたしは愉快そうに語った。カミヌマはときどき大声で笑いあいづちを
入れて話を聞いていた。

レストランのなかには家族連れや恋人たちが多くにぎわいをみせていた。ハイネケン
が運ばれてきたあと、あなたは乾杯もせず一気に飲み干してしまふ。「おい」とカ
ミヌマがあなたをたしなめてあなたは気まずそうに笑い、喉が渴いていたからといっ
て下を向いてしまった。わたしはべつに腹をたてたりはしなかった。シデハラが万馬
券あてたの知ってるか、とカミヌマは話題を切りかえる。わたしもそれについていっ
てここにいないシデハラのことを肴にしてまたカミヌマと雑談に興じる。

ビアレストランはあわただしく客のでいりがあり、騒々しく注文がとびかっていた。あなたはズブロッカを飲んでた。サクラの葉の匂いがあなたの鼻をくすぐった。黒パンとスモークサーモンを食べていて、視線を漂わせながらそこにいることを愉しんでいたようだ。だれもあなたを邪魔することはしない。霧をへだてるような遠い空気がそこには感じられた。あなたから何かを話すこともない。無口だけど陰気な匂いがない男、酒をよく飲む奴、という印象をわたしは持った。

わたしは新調した上着を椅子にかけた。傘をさしていたにもかかわらず上着の背中にも雨がびっしょりとかかっていた。その頃のわたしは体調をくずすまえの時期で外国語の勉強が趣味のいたって平凡な勤め人であった。貿易関係の会社で書類の英訳が主な仕事だったのだけれど仕事は趣味の延長線上のようなものです。こしも苦ではなかった。ただ年齢を経るたびに何か重いものが自分にのしかかるような気がしていた。休みの日には一日中英英辞典を眺めて単語の意味調べをしていると、なにげなくカミヌマに話したときに今晚の誘いを受けたのだった。「変わったやつがいるから来てみないか」カミヌマがいったことは嘘ではなかったが無口な気のいい男がそこにはいるだけだった。

あなたは自分の仕事の紹介を率直に「エンジニア」といった。わたしから仕事についていろいろ尋ねられたがあいづちのようなのをうつぶかりで具体的なことを話

さなかつた。

あなたは昔から自分のことを話すのは苦手だった。

「おいしい？」わたしは初対面でもケイゴやテイネイゴを使わなかった。

「うまいよ」あなたもその礼儀にのっかった。

二人の会話はそれきりでまたわたしと友人が会話をつづけた。あなたはずっと二人の話を聞きつづけながら「知らない人間と飲む酒も悪くない」と思った。「あんた呑むねえ」とわたしが言うと「好きだからね」とあなたは応えた。

〇 駅でわかれたあと、あなたはE線の電車にゆられながらまた文庫本をひらきはじめる。葉をはさむのをわすれてしまったから、漠然とした記憶をたどりながらこのあたりだろうというところから読んでいくが時折、この場面は前にも読んだことがあるなどというのが出てきてその度にページをばらばらめくってみたりもするのだけど結局あきらめて同じ場所から読んでいく。電車のなかには妙に人がたくさんいて、最初あなたは自分の名前が呼ばれていることにも気が付かなかった。クルハシさん、クルハシさん、とあなたの肩がたたかれたときにやっと相手を確認することができた。《依頼主》の一人だった。

「プライベートな時間に申し訳ありません。打ち合せをされていると承知の上ですが

条件はのんでいただけゆるんでしょか」粘りつくような生温かい声が耳元にささやかれる。喉元に込みあげてくる憎悪をあなたは堪えるので必死だった。《依頼主》は薄笑いをして帽子をとり会釈をした。角刈りのあたまがこの男のトレードマークだった。ここでお応えすることはできません、あなたはきっぱりといった。いい大人の男が顔を寄せ合って混んだ電車のなかでひそひそ話をしているから、周囲の乗客たちも奇異な眼をしていた。熱っぽい二人の視線がからがるたびに憎しきとはまた別の感情が何かその場所に宿るようにも感じられた。ゆらゆらと車内の光景が霞みはじめて、激しい頭痛があなたのあたまを射抜くように走った。

Q・ノリスケというのがこの《依頼主》の名前で友人たちと立ちあげたあなたが勤める会社の大事な顧客の一人だった。しかしQ・ノリスケはあなたの勤める会社の買収を目論んでおり、傘下に入ることを拒む場合は、ある製品を本来の半分の期日で届けよ、との条件を出したのだった。それが通らない場合は、今後一切の取引をなしにする、と告げられていた。Q・ノリスケの企業は業界内でも大手であり、その会社の方針は他の会社の動向も決めてしまうような存在感を持っていた。Q・ノリスケは寿司でも食べに行かないか、とあなたを誘ったがあなたはとうぜん断った。あなたは金輪際、私的な時間に交流を持つことを控えてほしいといって、見知らぬ駅で電車を降りてしまう。そこから逃げるようにビジネスホテルに入って翌朝はそこから出勤をし

た。

平日の休みの日が重なっていたからちよくわたしと会うこともあった。U 駅の傍にシネコンがあったから平日のひるまから海外の映画を観に行った。

観る映画はたいていわたしが決めるのに、映画がはじまってから先に眠るのもわたしだった。あなたもたいがい疲れていたのであとを追うように眠った。インドのミュージカル映画も、難解なフランスの映画も、冷戦時代のロシアを舞台にした映画においてもわたしたちの眠りをさまたげることはできなかった。眼をさましたとき、銃撃戦が聞こえたりすることもあって、まだ夢の中にいるのかと錯覚した。そうやってわたしたちはべつべつの夢を見ながらもひとつの時間を彷徨った。幾重もはりめぐらされた物語の小路を歩きながらこれが映画なのか夢なのか現実なのかもわからない昼気楼をくぐりぬけた。二人はいびきもかかずにきように眠りつづけた。ほとんど死んだようにしずかに。

片方が眼をさますころには映画は終わり近くになっていた。右頬にあなたは涎のあとを残しながらこどものように無邪気に眠っていた。起こすことを躊躇うぐらいに気持ちよさそうだったからあなたは家で眠るときもそうなのか、あるいは映画館だからこんなにも安息して眠りにつけるのか、わたしはためつすがめつ顔を覗きこみながら考える。気配を悟られたのか、あなたもそこで眼をさました。だれもわたしたちなど

をみてはいないはずだがそれでも二人とも眠ってしまうことが恥ずかしくて走るように劇場をあとにした。居酒屋で映画の感想を互いに語りあった。しかし憶えている場面がずれていたりすると話が噛みあわないこともあった。あるいは眠りのはざまでお互いが知り得た情報をつなぎあわせるなんて愚かなこともしていた。記憶もあわく滲んでいるものも多くて、やはりそれが夢によってねつ造された物語ではないかとお互いに疑いあうことも稀ではなかった。それでもいつまでもこんな時間がつづいてほしいとわたしは思っていた。歩いてきた路はべつべつで眺めた風景が重ならなくても、話しあうことでその迷路をわかちあい、つなぎあわせることができたから。砂の夢をよく見るわ、とわたしがいった。砂漠、砂浜、砂時計、砂塵……。だからわたしが砂の話題をいうときは映画じゃなくて夢の話をしているのかもしれないわ。あなたはなにもいわずに頷いた。そんな風にしてでたらめな映画観賞はつづけられた。

「どうとう冬がやってくるのね」。

「おれはかんねんしたよ。冬につかまってしまふことに」

「冬は嫌いだったの？」

「寒いのは苦手だが、冬は酒がうまいよ。夏もうまいけどね」

わたしたちは左右の確認もせずに夜の幹線道路を渡った。途端にクルマの激しいクラクションが雨のように二人を襲う。歩道からわたしたちをみる人がたくさんいた。

「迷惑ものが」「酔っ払いじゃない？」などと罵られていたのだらう。人ぞめきにまぎれてあなたはパスピエが視線に入った気がした。あなたはパスピエに意識をうばわれつつもわたしの話を聞いている。ヘッドランプのひかりが全身に降り注ぐ。

「自分の好意とは裏腹にからだは冬を拒絶するかもしれない。過去の重い出来事のように冬はわたしにいくつかの銃弾を撃ち込む準備をしているのかもしれない」あなたはふだんと違うわたしの言葉遣いにとまどって、通りの雑音からわたしの声を拾おうとしている。

わたしは拡声器をつかって夜の街に訴えたかった。同じ言葉をさらにちいさな声でそっと自分のためにささやいたとき、なにかがわたしの口をついて運命みたいなものを告げたようにも思われた。その声はやはりクラクションとエンジンの音に瞬間的にかき消される。わたしたちは往来を縫うようにして次の十字路をおおきく斜めに横断する。

クアラルンブールの菓子をあなたはパスピエに食べさせてみる。パスピエは包装紙をはがそうとするが上手にできない。二、三試したあとにパスピエは包装紙をあなたに開けてもらう。パイ生地のなかにドライフルーツが入っている菓子で、ぶどう・いちご・パイナップル味がならんでいた。パスピエはぼろぼろパイ生地のこなをこぼし

ながら食べている。ひとりで五個も食べたあとにまだ手をのぼそうとするから、とうとうあなたはパスピエからそれをとりあげてしまう。パスピエは空腹を満たし、居間で横になったまま眠ってしまった。ぼんやりとあなたはわたしのことを考えて胸を痛くした。嫌な予感がした。眠くなるまでこがねいろのウイスキーを傾けながら氷がとけていくのをみつめていた。

ある日、会社から帰宅していつもの燗酒をつくった。めずらしく空腹を感じて缶詰のごぼういわしをつまみにしてゆっくり食べていた。そこへわたしから「体調を崩して入院しました。もう会えませんが」とメールが来た。めまいがするようになってきた。どう反応していいか分からず狼狽して考えることを止めなくなった。あなたは返事を返さなかった。洗濯をして明日着るシャツにアイロンをかけた。そして眼を閉じると眠気はすぐに訪れた。メールの最後に長いカタカナの病名が記されていたが一度読んだだけでは憶えきれなかった。この日以来、わたしからの連絡はとだえたままだ。

《依頼主》はあなたの会社を圧迫しはじめた。製品に関する仕入れ先や取引先のとる態度が少しずつ変わっていった。Q・ノリスケの持つ人脈をつかえばあなたが勤める会社などひとたまりもなかった。あなたの会社の経営者はそれでも傘下にはいることを

拒んだ。そうして会社からも仲間は去っていった。現場で働くあなたは早過ぎる納期に対して遮二無二働くしかなかった。会社での寝泊まりも多かったがあなたは二日に一度は家に帰り酒をつくり、ドビュッシーを聴いた。パスピエは家でさびしそうに積木をしていた。つくっては壊し、つくっては壊しをパスピエは飽きずにつづけていた。透きとおった酒をみつめながら自分が携わっていることもそれに近いことなのだろうとあなたは考えた。わずかに許された時間でわたしからのメールを読みかえすこともあった。食事をしながら、《視察者》たちと話をしながら、夜中ふいに目をさましたとき、わたしの顔がすつと浮かんた。落ち葉を楽しそうに踏み鳴らして歩くわたしをみたのはどこだったか、あなたは思いだそうとする。近所の公園にある樅の林か。それとも一緒に観た映画で聴いたのかもかもしれない。だからだとつづく坂を宛てもなくくだりつづけるような日々があったことがなつかしかった。そのなつかしさにひきよせられてあなたはわたしのことを予感していた。虚しさが音をたてずに背後に来ていのだろうか、と振り向いたときにうしろにいたのはパスピエだった。ヨーグルトを持って立っていた。照明の消えた部屋にドビュッシーの「ベルガマス組曲 第四曲 パスピエ」が漂うように流れていた。

製品を納入した日の夕方、職場にはほとんど人がいなかった。同僚たちは明日から一週間の休みをもらい海外などで羽を伸ばすそうだ。あなたは隣駅のM町の蕎麦屋に

入り天井を食べていた。パスピエも連れてきた。パスピエはニシン蕎麦を食べたいと言った。てりのあるニシンのった蕎麦がすぐに運ばれる。パスピエはふうふう息をはいて蕎麦をすすった。ニシンは最後の楽しみにするといった。ここはわたしも来たことがある店だった。わたしは蕎麦屋でうどんを食べていた。いまの自分も蕎麦屋で天井を食べているわけだ、あなたは一人笑った。連絡をしていなかったわたしに会うのは気まずかったが、他にやりたいことがないあなたはわたしに会いにいこうとそのとき決めてしまった。

ネームプレートにアサシマサツキの文字を確認するとおそろのおそろ扉を開けてみた。病室では点滴を打ちながら眠っているわたしがいた。水色の寝巻を着て、髪を枕のうえにひろげて鼻でちいさく息をしていた。だれがおいたのか青林檎がテーブルにおいてあった。

果物包丁もあったから、あなたは剥いてあげることにした。それから林檎が乾いてしまふころになってわたしは眼をさました。途端、わたしはあなたに驚いたそぶりをみせてしまった。布団で顔の半分を隠しながら「何しに来たの」と尋ねた。

「暇だったから」

「そう」わたしは溜息のようないづちをうった。

「林檎を剥いてくれたの？」

「暇だったからな」

わたしは鼻で笑い、「欲しい」といった。あなたは傍にあった小皿に切れ端をのせてフォークと一緒にわたしの前に持ってきてくれた。

「さっきまでアフリカを旅していた……」

「アフリカのどこ？」

「ジブチとエチオピア。世界で最も暑い場所だよ」

わたしは髪をひたいに貼りつけるほど汗をかいていた。

あなたはハンドタオルでわたしの汗をぬぐった。

こどものようにわたしは素直に眼をとじていた。

「夢のなかで？」

再びあなたが尋ねる。わたしは濡れた息をはいてから

「そう。わたしは深い峡谷と砂漠の海を歩いてきた。シヨールであたまを被っていたわ。陽のひかりを遮断しないとすぐに熱射病で仆れてしまうから。アラブ地方で買ったくびかざりをしながら目的もなく彷徨いつづけているの。アフリカでもっとも低い地域を旅していたの。旅の途中で不思議な光景ばかりが眼に入ったわ。塩の奇岩群、幾つもの火山、鉱物が湧き出る温泉、そして砂漠。摂氏四十五度の世界でわたしは黒こげになるかもしれないと不安になりながらもがまんづよく歩きつづけた。靴を穿い

ているはずなのに裸足のように足裏が熱かった。ふいに複数の声と足音が砂影から聞こえてきて、丘を越えようとティグレ族のキャラバンが日陰で休憩をしていたの。わたしは水をもらえるかもしれないと思って興奮したわ。近づいてみるとラクダやロバは例外なくおおきな荷物を背負わされていた。わたしは水をわけてもらい喉を鳴らして飲んだ。

《あなたは旅人か?》とキャラバンの男性が声をかけてきた。

《僕らが歩いてきた方角へ向かえば塩の湖があるよ。僕らはそこで採掘された塩を運んでいる》別の男性がやさしそうな声でそういう。わたしはもしかしてだまされているのかもしれないとすこし疑ってしまった。けれどその言葉を地図にしてわたしは塩の湖へ向かう。

わたしがというよりわたしの足がその塩の湖を目指しているようだった。わたしは全身が痒くなつて垢をむしりながら塩の湖におかたて歩をすすめた。砂山の前方に青いあざやかなシヨールを巻いた女性が歩いてたわ。わたしがいくら早歩きになつても彼女に追いつくことはできなかった。わたしは紅いシヨールを巻いていた。彼女の青はとてもあざやかで女らしくわたしは自分の紅いシヨールをみじめに思ったわ。わたしは彼女と自分を比較しながらその美しいスタイルの女性を凝視しつづけていた。そのうちに空の色が変り、土の色が変わった。アツサル湖についた。湖に気をとられて

いるうちに青いシヨールの女性はどこかに消えていたの。わたしは氣をとりなおしてもう一度あたりの風景を眺めてみる。わずかに残された水辺のほかは地平線まで白一色。空の青色との対比がまぶしい。わたしはとびあがるほど嬉しくなった。湖のそばで塩漬けにされた山羊の頭蓋骨が売っていたの。神秘的な雰囲気には氣圧されながらも塩の採掘所まで足を運んだ。直方体に切り取られた板のような塩がラクダの背に積まれていった。みているだけでしょっぱくなりそうな光景だった。アフアール族の男性がわたしに話しかけてきた。ティグレ族の言葉は理解できたのにアフアールの言葉は理解できなかった。ただ《死》という言葉と《生きる》という言葉だけ理解できた氣がした。それで夢は終わり。オチなんかはないの」という。

「あなたも何か話して。何でもいいから」

「何でもいいっていわれても。話すことなんか何も」

「お酒の話でいいよ。お酒好きなんですよ」

「酒……」

「そう酒」

「あんたが憶えているか見当もつかないが、あのレストランで飲んだ酒はズブロッカだった。ズブロッカについておれが知っていることを話そう。よく知られている通りこの酒はサクラの葉のような匂いがする」

「憶えているよ、ズブロッカ飲んでいたこと。全然話してくれなかったね、あの夜は」
「もともと話すことは得意ではないからな……」

「いいわ、つづけて」

あなたはこめかみに人差し指をおさえて正確な言葉をひねりだそうとしていた。

「ズブロッカはウォッカの一種でポーランドのビアウォヴィエジャの森にしか自生しないバイソングラスという植物を漬けこんだものなんだ。ビアウォヴィエジャの森は世界遺産に認定されていてヨーロッパで唯一残る太古の森として神聖視されている」

「太古ってどれぐらい前？」

「分からないけど何千年とか何万年単位だろうね。伝説のバイソンが住む森だよ」

伝説のバイソン……、とわたしは鸚鵡返ししてから再びからだを横にした。

「いい話を聞いたわ。来週あたりはそこに行ってみるかもしれない」

「バイソングラスをおみやげに摘んできてくれよ」二人は笑いながら乾いた林檎を食べた。

ふいにからだを委ねるように思いつきのまま行動をする癖がある。

わたしは病院のひき戸をおもいっきりあけて病室をあとした。寝巻の上に厚手のコ―

トを着てあなたにもついてきてもらった。あなたはわたしにどこへ行くのか尋ねなかった。病院独特の匂いが入院した当初はよく鼻さきにのぼってきたのにいまはそれを見つけることもできなかった。顔見知りの看護師と眼が合わないように廊下の端を足早に歩きつづけた。だれに咎められることもなくわたしたちは正面玄関から病院のそとにでた。陽のひかりをあびたときに、肌がよるこぶような心地がした。薄い冬の陽は病院の中庭にあるちいさな温室の《ばら園》にもどどいていた。ここは患者たちのために陽がでている時間だけ開放されている。緑門をくぐり、温室のなかに入る。あなたはその暖かさに驚いている。

薄ももいろのばらが疎らに咲いていた。棘は新芽のように柔らかそうだった。わたしにとって土を踏む感触は久しぶりのものだろうとあなたは考えていた。木製のベンチがあったから二人は腰をかけた。わたしはずっとばらをみているがどこか焦点がさだまらないことも気づかれていた。ため息をついてしまう。

「どういうふうな歳をとっていききたい？」わたしは妙な質問をあなたになげる。

「食事をして酒を飲んで暮らす。あとは時々、映画や音楽に触れることができればいいかな」あなたはためらいもなくそう応える。

「きまっているのね」

「きまっているというか、そういう暮らし方しかできないな」

ベンチから立って、また《ばら園》のなかを歩く。まだ若い女の人がベビーカーをおしながら歩いてきた。すれちがう瞬間、そっと会釈をする。自分の母親もこうしてよく知らない人に会釈をする性格だったといったのはわたしだったかあなただったか思いだすことができない。わたしたちの視線はばらを見ながら、ばらから遠ざかって遠くをみるような眼になっていった。わたしたちは陽のひかりを受けながら何周も歩いた。パスピエは花をみることにもう飽きてしまったのか枯れ枝で土をいじりはじめた。あなたはわたしにパスピエがみえているのか不思議に思った。

「死ぬことも生きること、ふだんは忘れてしまいがちだけど、あるふとしたときにどちらかにすがってしまうことがあると思う」

「あるだろうね」

「ふとしたきっかけでどちらかを意識したとしても、それまで通り生きること死ぬことも忘れてふだん通り時間を過ごせたらいいな。どちらにもすがりたくないよ」

「肝がすわっていないとなかなかそうはならないぜ」みちびかれるようにあなたは出口へと歩いて行った。わたしも黙って出口に向かう。そして二人は緑門をくぐる。

「どーんと待ちかまえて、生きること死ぬことも、どちらがやってこようとわたし時間の一部としてとらえたい。生きるとか死ぬとか……、その二つのこと以上に大切なことがこの世にあるんじゃない、って気がするわ」

「たとえば？」

「たとえばってのはすぐにはみつからないな」

《ばら園》にはわずかな時間しかいなかった。ここに来た意味があったのかどうか分からないが、ここでしか話せないことがわたしにあったのかもしれないとあなたは直感した。

「また眠るね。こんどはいつ来るの」

「十二月に入ってからになるな」

「分かった。からだに気をつけて。また旅の話をしてあげるわ」

わたしが話したことは夢なかのできごとかもしれないなかった。

これが夢ならきょうの披露宴に足を運ばなくて済むのにとあなたは考えていた。

もうあまり連絡を交わすこともない友人の披露宴に呼ばれたとき、自分がそこに行つて何になるのだろうと考えてしまった。わたしが退院したばかりのこともあって、あなたは家におきたかった。けれどなにかのはずみで出席と向こうに通知してしまつた。わたしはクルハシと棲むようになってから植木鉢でアロエを育てはじめた。あまり枯れたりする心配のないつよい植物を眺めたくなつたからアロエを選らんだ。虫にさされたわけでもないのにアロエの葉から汁をだして肌になめてみることもあつ

た。あなたが朝、そうして憂鬱そうに考えているときもわたしはアロエの観察をしていた。あなたはあわただしく出て行って、わたし一人が部屋に残されてしまう。あなたは披露宴が執り行われるホテルに到着しても、その日の朝のことを考えていた。わたしがなぜアロエを育て始めたのか、について考えているのかもしれない。あなたは薄霽がかかったようなぼんやりとした意識のなかで朝の時間と披露宴で行われる催事を往復していた。

クルハシくんこれおみやげに持って帰って、とうとうに何の文脈もないまま、かつての同級生からばらの花束をもらった。冬なのにばらは艶やかに咲いていた。これが何か佳いことの前兆になればと期待をめぐらしてみたりもしたけれど、花に背負わせるのは酷な気がしてその匂いをふんと嗅ぐにとどめておいた。アサシマは何をしているだろうとぼんやりと考えた。そしてE線の電車にゆられながらあなたはこのばらの行く末について考えていた。

(了)

竜のなみだ

竜のなみだ

竜のなみだ

大人らの土足に

踏まれたあとの庭に

にきびの花がまたひとつ

かつては竜が飛んでいた

ものすごい風を切って

ただの積木がそこまでするとは

誰も思わなかったろう

甘い囲いの外から

生きるものめがけて

大人らの歓待の腕

新嶋
樹

竜のなみだ

にきびの花をつぶすたび
なみだが頬をつたって
庭には竜が流れつく
一発でしとめられてしまった竜が

かつての美しい声はなく
きらめいた鱗は剥がれ
ひるがえる翼はもがれた
そこに何がいるのか
子どもは知りたくもなく
両眼をつぶして出ていった
棄てられてしまった庭には
まだ竜がうずくまっている
まだ竜がうずくまっている

たとえば庭で、落下して

深街ゆか

たとえば爪のさきで本をめくるように

残像にもなることができなかつたわたしたち

花粉にまみれた便箋にまるやさんかくの記号を書いて

日曜日の夕暮れどき泡立つ器官へ落下する

中庭を這うように、だらだらとのびるモッコウバラの

無抵抗な額をむしりながらともだちと

流行の歌を口ずさむくちびるは、怠惰な香りでもって受身の存在

だからわたしたちは、いつもサビの部分にさしかかると黙り込んで

つま先で土を踏む、それから蔦が絡まったベンチにこしかけて

詩の朗読をはじめ、その横顔に

季節に不似合いな花を生けてくれたら、誰かの

とおい記憶にとどめておけるかもしれない

くすんだプレバートを何枚も重ねたような記憶に

鮮やかな花びらがはさまっているような人間はいないようにだから、と言ってわたしたち、朗読をつづける

「中庭でわたしたちは、詩の朗読をしています

詩の中に中庭があります、中庭で私たちは、

わたしたちはわたしたちと目が合った

わたしたちは詩を朗読していた、遠浅の緑の

詩の中、わたしたちいつまでも帰ることができない

そんな事件の中に埋没することは、猶予を与えられたようで

生産的で、たとえば、に重心をあずけたら日常はぼらんでいあで

(たとえば、世の常という言葉が切り裂くのは受精でした)

たとえば、わたしたち、世界の軸が腹ペコに抱擁され、たとえばくまのぬいぐるみを抱くように、愛でられ、そのなかで育んだもの、たとえばのはなし物語、たとえばのなかで、本をひろげれば詩的、いつもとおい、わたしたちは絶えずたとえばの庭で、そこは、猶予も無く、それらしいものを探し出しているのだけれど、それらしいものなんて誰も知らない、たとえば、残像にもなることができなかつた、くすんだプレパラートの記憶、たとえば、落下するよりも前に優しい人に一掃されたなら、たとえば、あなたが優しい人でわたしたちが、たたたたたたとえば、と言って落下しても、明日

たとえば庭で、落下して

はゆるやかな曲線の上、たとえばのともだち、日常はぼらんていあでした、だから、ひらりと落下します

さよなら、残像にもなれなかったあなた

鳥の鳴く街

る

美しい指をもつ人たちから
零れおちたカスタネットを
帰巢本能をわすれた鳥たちが
頑なに鳴らし続ける街

アルコールが全ての男たちの母となり
街路灯に浮かびあがる
娼婦たちの微笑がぬかるみ
月は冥府の口元に似て
歪な歌を口遊んでいる

そうして羽を持たない歌が
射し染める光のなかで
ポロネーズの最初の一節を叩く指のように
おろかに逃げ惑い
捨てられた子犬に

鳥の鳴く街

やさしい音色として響いた

羽を持たない全ての生き物は眠る

かなしさとやさしさをないませにして

ベッドの上で蒼褪めたままの少女は

鍵穴から聞こえた悲鳴を

身体に籠る冷たさに奏ねる

鉄塔に羽を休める鳥たちは

嘲る月の光を啄ばみ

また次々と小さい天蓋へと飛び立ち

オルゴールのネジを回し続ける

羽を持たない全ての生き物は眠る

あらゆる間違いを眠りながら

風に触れようとする指先に

二つの心根を赦して

自由投稿

「詩4篇」

「オートマタ」

椅子に座ったら（壊れてしまう）

さよならを明け初めて

知らない土地に（今日も雪が止まない）

（ルージュに濡れた口元に

灰かに白く灯るあなたの（温かい

吹雪のような（抱擁にくたびれた

これからのわたしは（壊れてしまう）

雨が止まない（合鍵という言葉の

壊れてしまう（本当の意味を

（さよならを明け初めて

知るのだろうか（意味も無く

差し出された（窓の外には

降り止まない（雪の合間に

る

詩四篇

射し染める月明かりが

潰えていく歳月を選びながら

次第に透明になっていく

(助けてください、転びそうな笑みの中から

(助けしないでください、転びそうな

寝ころごうたら(壊れてしまう

さよならを明け初めて

(輪郭を求めています

フランス人形(青い瞳

金色の髪からぼろぼろ(零れ落ちる

わたしを繋ぎとめていた(ゼンマイのような

(なみだのような

詩四篇

「波打ち際の人魚のために」

踊り子になりたかった掃除機の話をする

女の子はいつでも寝てしまうものだど気付いたから

話の続きをすりかえて、僕は

カスタネットになりたかった貝殻の話をしている

女の子の寝息がセミダブル泊 3500 円の部屋で

ギターの上から二番目の弦みたいな音でなっている

貝殻は高校を出たら東京にいくんだって言う

僕は時々あくびをしながらすみやかに話をでっちあげている

ライブハウスの予約をもう一度たしかめていたら

女の子は二回も寝返りをうった

とてもきれいな二回ひねりだったけれど

それは僕から遠ざかる方向で、話は進んでいった

貝殻は、掃除機が踊り子になるなら

僕はカスタネットにならなくちゃいけないよな、と

誰に打ち明けることもなく、地元を去ったのだ

ライブのチケットに書いてある名前がよく読めなかった、

ペンギン、と英語で書いてあるところまでしか読めなかった

女の子はシングルベッドの範疇を越えて

僕から遠ざかっていった、貝殻は東京という街に着いた

僕はシングルベッドで迷子になった女の子のことを思い出していた

とてもかわいい子だったけど

お金を渡さないといけない女の子だった

貝殻もきつと、東京で迷子になると思わない？

と聞いても、女の子はまだギターの上から二番目だった

そして貝殻は迷子になった、もちろん

迷子というのは比喩的な意味でだよ

と教えてあげるとは忘れなかった

女の子はいつもみんな

シングルベッドという概念を越えて流されていくのだった

貝殻は迷子のまま掃除機のところへ帰ってきた

掃除機は掃除機で迷子だった、もちろん

迷子というのは比喩的な意味でだよ

と教えてあげるとは忘れなかった

掃除機はシングルベッドの概念を越えて遠い沖まで流されていた

だからさ、貝殻は泳ぐことができないでしょ？

女の子はずっと遠いところで上から二番目のままで

僕の物語だけがむなしく波打っていた

ライブのチケットが読めなかった

だから、貝殻はそこでちゃんとカスターネットになったんだよ、って

眠っている女の子の背中に教えてあげた

詩四篇

「夜に」

全ての光の中で夜だけが夜であることをゆるされている
申し訳程度に口ずさんだ唄を優しくしてくれるなら
ホッチキスでとめられたような会話をせずに済むなら

昨日放り投げた指のしこりが

今日、真っ白な解答用紙になって降り注ぐ

僕たちは真っ白な解答用紙を拾い続ける

スタバでコーヒーを飲みながら

英会話のリスニングをしているOLも

研究室に寝泊りして

工学を研究する院生も

こぞって答えを用意しようとして

はじめて答えるべき問題がないことに気付く

けれど誰も彼もがかき集めている

昨日放り投げた指のしこりを

詩四篇

まるで答えを探してみたいに

それは優しい音楽だろうね

それは暖かい暖炉の火だろうね

申し訳程度に口ずさんだ唄を優しくしてくれる

YESでもNOでもない曖昧な相槌だろうね

「失踪期のモノローグ」

ただ浮遊していくだけなのです　この青白い血管から

夜のうすまくの小さい孔を通り抜けるだけの浮力がようやく

まう雪のようにただただ輪郭だけをあいまいにして　ただ

その光屑だけをふりまとうような微細なしんどうだけがわたくしであるように

呼気の白さと煙草の煙が等しくなり

罅割れた指先を見つめ

そこから孵化した冬

冷たくされた赤蜻蛉が螺旋を描いて

更けてゆく季節

それは立方体でしょうか　それとも円環をなすのでしょうか

さらさらと崩れ落ちるのでしょうか　いままでと同じなのでしょうか

ほどけるままに微かな風に流されるままに穏やかに沈んでゆくままに

詩四篇

あいまいな光への澆力だけを　しるしとして　摩擦だけをただわたくしとして

埋立地に何万本もの

傘が埋葬されている夢を見る

綺麗な朝が終わった　土の中で眠った

目覚めた指先にとまった

赤蜻蛉がいつまでも燃えていた

全ての傘を

火に焼べてしまえたらいいのに

唯、傘だけが光のなかで

咲かないから

詩四篇

消灯

新嶋 樹

一

ふるさとの香川県を出てから十年、ずいぶん経ったように思うが、人と話していて、いまだに聞かれることがある。

「どうして島根県に？」

理由をしゃべる、というのが得意じゃなかった。多くの理由があつて島根県に来たことは確かなのだけれど、それを「くだから」と簡潔な言葉でとらえて説明することができない。ひとつひとつ相手に伝わるようにほぐしながらしゃべっていくと、どうも煩雑になってしまうような気がして、やめてしまう。聞いてくれた相手へ誠意を見せるために、どうにか短くまとめようとするのだが、口にする、どうもうそっぽくなってしまうのだ。

大学生のころ、最も多く使っていた理由は次のようなものだった。

「雪が見たかったからです」

「ふうん」

相手の、ふうん、という声や、あまり納得のいっていないらしい表情を見るのがほ

とんどだった。「本当にそうなんです。香川では降らないから」「ああ」その相槌にもまだ、納得しきれないものがあるのを感じる。本心を隠していると思われたかもしれない。なかつた。

「三年間、関東で仕事をしていましたが、島根の人と結婚しようと思ひ、戻ってきまして」

今はこう言うようにして、これなら、なるほど、とたいていの人は納得するが、肝心の島根に來た理由はわざと棚上げしている。それでもつつこんで聞かれるなら、また「雪が見たかったから」とか、「香川県の外に出てみたかったから」とか言うしかない。結婚しようと思ひ、という理由についても確かにそうだし、決して本心を隠しているわけではないのだけれど、どうもうそをついているような後ろめたさが残ってしまうのだ。

思ひがあつても言葉がぶれる。どんな言葉も思ひに足りない。

他人にうまく思ひを伝えられる人になりたかつた。人生のどの場面をふりかえつても、ただそこに突つ立って何かがひらけるわけではなかつた。それでも中学校までは近所に住んでいる、同じテレビゲームで遊んでいる、同じ塾、同じ教室にいる、ということ、輪の中の、はしっこぎりぎりにあることができた。これは幸福なことだと思ふのだけれど、ときどき輪から外れても大人が気づいてくれたり、子ども同士

でなんかなったりした。

本当の難しさを実感したのは高校生のときで、だれとしゃべってもうわべだった。友だちだと思っている子も何人かいたけれど、ひとたび学校から離れてしまえば、連絡を取り合うこともなかった。

何人かのグループといっしょに帰ろうとして、自転車を出そうとしたときである。自転車に引っかけていた傘が消えている。盗まれたらしい。みんなでラーメンを食べに行こうかと相談していたのだけれど、土砂降りの雨の中、傘なしでは困る。そこで傘を差し、今まさに自転車を走らせていこうとするグループの子らに、事実を告げた。

「傘、盗まれたみたいなんだけど」

「ふうん」

しばらく沈黙があった。ひとりがこう言った。

「じゃあ、また明日ね」

「うん」とうなずいて、「じゃあ、また」と答えることしかできなかった。

グループは行ってしまった。その背中を、あれ、ずいぶんあっさり置いて行くんだな、と思いつながら見ていた。友だちという言葉が、そのときにぶれた気がした。しばらく軒下にいたけれど雨はやまず、家に向けて、自転車を全速力で走らせた。全速力で走れば、背負った鞆の中身は濡れないということが分かった日だった。

後になってもこの駐輪場のやりとりをずいぶん考えたけれど、今でもあのときのかれらに対して、被害者意識を尖らせているのを発見する。

かれらの対応は冷たいんだろうか。いっしょに傘を探してくれるなり、自転車を降りて傘に入れてくれるなり、どうとでも手があったはずだ、冷たいやつらめ、と心の中で罵った、あのときの感情が今も消えずに残っていて、正当性を主張している。いや、どうにかしてくれ、いっしょにラーメンを食べに行きたいんだ、と伝えればよかったところをすべて呑みこんで、「なんだけど」で止めてしまったこちらが、いけなかったのかもしれない。あのとき、どんな顔でかれらに「なんだけど」と声をかけたんだったか。かれらに頼むような顔ではなく、むしろ、かれらを見送る顔をしていたんじゃないか。

輪の中にタダでいられると思うのは楽観にすぎるのは分かっている、思いを察してもらおうとするには関係が足りていなかった。分かっているながらも、冷たいやつらだ、どうしてあのとき置いていったんだ、と尖った言葉が、ふるえながら頭の奥を飛んでいる。精神に時効はなく、自己弁護ばかりは優秀で、勝手に犯人を作り上げて呪いつづけることを許可する、手前味噌の司法機関をもっている。人とうまく関係が作れる人間ならよかった、そういう人間に生まれてきたかったと、まるでその能力がだれかから当たり前に与えられるもののような顔をして、雨の軒下に立っている。

島根県が香川県の真北にあつて、冬には雪を降らせるらしかった。中学生のころに家族で出かけた松江城や武家屋敷前はでこぼこの雪道だった。小泉八雲がこの冬に耐えきれずに一年足らずでいなくなつてしまつたという逸話の残る土地だった。高校三年生の冬、ひとりで電車を乗り継いで大学受験に來た島根県は、雪は降つていなかったけれど、あつい雲が立ちこめていて、香川県のさわやかに晴れた冬空とは対象的だった。

大学の前でバスを降りるとき、バスの料金を間違えて、両替専用の投入口につっこんでしまつた。気がついた運転手が腕を伸ばして、下から出てきた細かい金を次々に料金入れに投げていく。その挙動を見て、どうやら間違いを犯したことに気がついたらけれど、きちんと判断をする頭が働かず、無言のまま、両替口に小銭を入れる手を動かしつつづけた。うしろに立っている受験生がみな、こちらを見ている気がした。運転手は何も言わず、すばやい手さばきで、料金入れに十円玉を入れていった。押し出されるようにバスを出て、大学の門をくぐり、しばらくしてから、ああ、しまつた、と思つた。申し訳なかつた、せめて一言、謝ればよかつた、と。ふりかえるとバスはもう次の停留所へ向かつており、後ろにいた受験生の集団がきびしい顔をして近づいてくるのだつた。

新しい土地にいれば自分にもまともな友だちのひとりやふたりくらい、簡単に作れ

るような気がしていた。高校ですっかり懲りたはずなのに、まただれかが寄ってきて、思いに沿うようなやさしい言葉をかけてくれるものだと考えていた。大学入学の直前から始めたひとり暮らしの数日間は、だれとの会話もないままに過ぎ、いくつかの手続きや荷ほどき、生活の準備で埋まってしまった。入学式の日、すでに周囲はグループを作っていた。

いったいどこにグループを作る時間があったんだろうと思う。説明会のときも、そのあとの簡単な自己紹介でも、教育学部の同級生たちは、自分はひとりではない、というオーラを出しているように見えた。だれかが立ち上がるのを見つけると、あ、あの人はまだひとりかもしれない、と思う。その人の挙動を目で追っていると、すぐどこかのグループに合流し、話しかけているところを発見するのだった。しかもその人は、もう、それが一度目の接触ではないことが明白な、打ち解けたような笑い方をするのだった。

「これからメシ行く人ー」

「あ、行くー」

「どうする？」

どうする？ 今名乗り出れば、きつといっしょに話すことができるだろう。けれど、も男女入り混じった十数人のグループの会話が、どうしようもなく遠く聞こえていた。

講堂の、長机二つ分の距離を詰めることができず、悩んだあげくに、ひっそりと、出ていく。

ひとりさがしをつづける日々だった。教室の後ろの方に座って、同じ講義に集まった人たちの中に、ひとりで行動する人を見つけようとした。学生食堂やメインストリートでも、この人はひとり、この人はひとりじゃない、という分類作業を頭の中で行っていた。少しずつ、ひとりは見つかっていった。次は行動だ。でもなんて声をかければいいだろう？

新入生の一斉健康診断は、うってつけの機会に思われた。何しろ人間が密着している。まだどこにも属することのできないひとりを見つけるのは簡単なことのように思われたし、行動もしやすく感じられていた。「まだ寒いね」「背え高いね」くらいなら言える気がして、口の中で何度も唱えていた。靴や貴重品を外すように言われ、身長、体重をはかられ、渡された尿検査用のコップにトイレで尿を流しこみ、尿を渡し、たっぷり二本分の血を採られ、血圧計にぎゅうぎゅうしめつけられ、まばたきをし、上下左右を答え、ボタンを押し、シャツ一枚でレントゲンを撮られる。まさかその間、だれとも話することができずにただ流されて、「はい、これで終わりですよ」というあつさりした声を聞くとは思っていなかった。うそはよくない。本当は、きつとそうなるだろうと思いつづけていた。

二

妻は同じ大学の出身で、今はその大学の事務職員をしている。お互いに仕事を終えて帰宅し、夕飯を食べるときになって、大学生のことを話す。妻はよく大学生のことを、若い、と言う。

「卒業した次の年くらいは、サークルの勧誘で、新入生ですか？ って声をかけてもらえることがあって、そのたびに、ええっ、ちがいます。って喜んでただけど、もう最近は、絶対ないよね。大学生が、自分と違う生き物みたいに見える」

「若いっていうなら、おれらも十分若いと思うけど」
「そんなことはないよ、もう、わたしおばさんだよ」

ガソリンスタンドでオイル交換をしているとき、待つ部屋で、妻が雑誌を取ってくる。めくりながら、ふうん、へえ、という顔をして笑っているの、のぞきこむと、「この雑誌に出てくるモデルの年齢、ほとんどわたしたちより年下になったね」と言うのだ。二十二歳、二十五歳、二十歳、と指差していきながら、大学生のころに読んでいた雑誌が、遠い世界のもののように見える、とつぶける。オイル交換を終えてスパーマーケットへと自動車を走らせる途中で、「あの雑誌読んでから主婦雑誌読んだけど、ああもう、わたしこっちだって、すぐ思った」とつぶやいていた。

確かにそういう年齢になってきたのかもしれない。妻の言うことはよく分かるような気がする。このごろは十代、二十代くらいの人を見つけると、すぐに年齢を確かめたくなるようなところがあって、テレビで活躍するサッカー選手や野球選手、フィギュアスケートやバレーの選手たちが、自分たちの年齢を追い越していないかと、ひやひやしながら見ているのだ。そして同年齢以上の人が第一線で活躍していると、あつ、まだ大丈夫だ、と感じるのである。いったい何が大丈夫なんだろうか。

大学で学費徴収を仕事にしている妻は、最近の学生はちよつと変だ、と言う。

「まあうちの窓口に来るような学生は、親が学費払えなかったり、うまく手続きできなかつたりして、すでにだいぶ問題抱えてるように思うんだけど」

「そういうこと言っているの」

「でも変なんよね。なんか、年々変になっていく気がする」

学生が親の収入証明を学費の窓口に取りに来た話や、片言で話すのでほとんど聞きとることができない学生の話をする。

「うまく日本語を話せない留学生はいっぱいいて、そういう人はうちの窓口にもよく来るから、留学生だと思おうわけね。だけどたまに、あんまり片言だから、うわー、これは留学生だな、と思つて、学生証を見せてもらったら、しっかり日本人だったりするんよね。両親ともよくある日本人名で、外国要素が入つてるとはとても思えない」

「それ、よくうちの大学入れたね」

「でもその子は別に日本語を知らないわけでも、頭が悪いわけでもないんだと思う」
「なるほど」

よくうちの大学入れたね、と返した時点で、妻が何を問題にしようとしているのか、なかが分かっていた。

妻がこんな話をしたことがあった。休学して二カ月の大学院生がおり、半期八万数千円の学費の振込がまだだったので、妻は書面で催促をした。するとある日、その学生から指定口座に入金があった、確認をすると九万円の振込があった。正確に説明していたはずなのだけれど、指定よりも多い金額が入金されていたのである。そこで学生に電話をかけ、一度事務所に来てもらおうことになった。

窓口にやってきた学生は、フード付きの白いトレーナーを着て、下はジーンズ、無精ひげを生やしていて、妻の言葉では「地味なタイプ」だった。

「電話でも確認させてもらいましたが、九万円入っていたということでは間違いありませんね」

「はい」妻に返事をするというよりも、つぶやくような声だった。

「実際よりも多めにいただいているので、お返ししないといけないんです」

「はい」

「ですので、こちらの書面に、必要事項を記入していただきなのですが、今日、この間お願いしてました、印鑑はお持ちですか」

「ああ」少し遅れた反応で、学生は肩にかけた鞆を探り出したが、時間がかかると思ったのか、途中で動きを止めて、「はい」と言い、うつむいた。

学生は必要事項を書き、窓口に戻ってきて書類を出した。何も言わずに窓口に立っているの、パソコンに向かっていた妻はしばらく気がつかなかった。

「では二週間ほどで差額が戻りますので、ご確認くださいね」

「はい」

学生は帰っていった。そのときはまだそれほどの印象をもたなかったらしいが、しばらくして妻が学生の情報を確認していたときに、異変に気がついたのだという。

学生が手書きした書類には、「吉永昂大」という名前が記されている。ところが学生証のコピーや、パソコンに入力されている学籍を確かめると、「吉永晃大」となっているのである。「コウ」の字が登録と違うのだ。これは問題だと思って学部生時代のデータを調べたところ、学部生時代には、確かに本人の書いたとおり、「吉永昂大」で登録されている。つまり学籍管理の人間が、大学院への入学手続きの際に漢字を間違えて登録してしまったようなのだ。これはもちろん謝って訂正しなければならぬことなのだけれど、院生になってからすでに一年近く経つ今の状況で、本人が一度も、

「自分の名前が違います」と言いに来なかったことに、妻はおどろいたと言う。学生証は学生食堂や図書館に入るのに必要なものでもあるので、一度も見たことがないというのは考えづらかった。自宅に届けられる書類もすべて別の名前で送られてきているはずである。

学部生の「吉永昂大」は消えて、院生の「吉永晃大」が新たにあらわれた。ふたりの人間が大学の管理システムをすれ違った。正しい人間は物理的に存在しているのに、間違った人間の存在が許されている。

妻の話聞きながら、なるほど、おもしろいな、と思った。

「めんどろだったんかね」

「分かるけど、学生証は身分証でもあるんだよ。本人の信頼も、大学の信頼もゆらぐでしょ。それに、別の名前がひとり歩きしていくのが、気持ち悪くなかったのかな」情報の限定された状況で、理由をとやかく推測し、ここに記すようなことはしたくないけれど、大学事務員の立場を有し、大学生から離れた自分をつよく感じているらしい妻にとってみれば、この状況を異常なことだととらえるのは、妥当なように思われた。

なぜ「吉永昂大」は一年間も名前の間違いを指摘しなかったのか。これだって本当に確実だとは言えないが、ひとつだけどうも確からしいと言えるのは、「吉永昂大」

が「吉永晃大」であることを自分から選びつづけているのではないということだ。これは署名を求められれば、正しい名前を書くのである。

「社会では、そういうの、やっていけないでしょ」

妻の口調には、大学生を、最近の若者、と断じて叱咤するようなひびきはなかった。寄り添いすぎず、突き放しすぎず、自分のこととしてではないけれど、自分の内側を見て話しているようなところがあった。大学事務としての五年間の経験をふりかえっただけでも、言えない、言わない大学生が、増えているように感じるのだと言う。増えている、というのは統計を取ったわけじゃなく、妻が自分のことを「おばさん」と言うように、少しずつ大学生を自分から遠ざけて見ている証拠なのかもしれないけれど、まだ妻が上からものを言っているようには思えない。やっていけないでしょ、の奥に、妻の五年間の苦勞がひびいている。

社会という言葉はずいぶんあやしい。目の前に立ちただかっているくせに、つかまえようとすると、するりと逃げる。働きはじめるまではずっとぼんやりした言葉だった。働きはじめるとだんだんピントが合って、輪郭だけはくっきりしてきたのに、中身にはいくら手を伸ばしてもきちんと触れなかった。社会という言葉を追いかけて、とらわれて、こういうものだとな得しつつ、新たな疑いをいだいて、いまだにうまく距離をとれずにいるのだけれど、「そういうの、やっていけない」というのは分かる

気がする。確かに自分から何かを選ぼうとしなければ、やっていくことは難しいだろう。そういう事実を何度も見せられてきたように思う。

その大学院生とは、年齢にすれば三年や四年の差がある。けれどもかれの周囲との関係のもち方は、自分たちとは違う種類のものなんだろうか。これは一過性の若さだろうか？

三

ずいぶん田舎だと聞いていたから、島根県に來れば星空が見えると思っていたけれど、松江市は明るかった。香川県高松市にある実家の方がかえてよく星が見えたくらいだ。アパートのベランダで缶ビールを飲みつつ、満天の星を眺めながらだれかとしずかに話をしたという願いは、大学に在籍していた四年間で一度もかなえられないことはなかった。もっともアパートのベランダでなければ、一度だけある。

今は合併されてしまったけれど、大学に通っていたころ、東出雲町はまだ松江市ではなく、建物の多い市内中心部とは違う雰囲気があった。所属していたサークルが中山間地域に住む高齢者のための介護予防拠点施設とつながりをもっていて、大学の休みに出かけていっては、竹トンボや竹馬といったおもちゃの作り方を習ったり、地域の行事に参加させてもらったりしていた。施設の主催するホテル祭りというイベント

にポランティアとしてまじらせてもらい、そばやうどんを運んだり、屋台の売り子をした。サークルの仲間といっしょに会場となった三十メートル四方の広場を行ったり来たりして、忙しく働いた。汗のふきでるような昼の暑さがすぎると、冷たい風が空気にまじった。山陰に日がしずみ、あちこちの提灯に火がともされはじめる。初夏の時間の流れが肌にしみた。

「ここはいいけん、ホタル見に行ってきたよ。あんたら、あんなにたくさんのホタル見たことないだろ」

ビールで顔を真っ赤にしたおばさんに言われて、近くにいた数名の同級生と合流した。まだ働いている部員もいるはずだったけれど、建物の外にある光源はテーブルに置かれた提灯だけで、広場に立っていると足元すらよく見えない。

「全員抜けるわけにはいかんからね、行こうか。行きましようか」同級生と何度も、本当に全員に声をかけずに行っていないんだろかと迷って、近くをうろついているうちに、数名いたはずの人がひとり消え、ふたり消え、背の高い河野君とふたりで残されていた。

ホタルの群生が見られる川辺は広場を抜け、あせ道を歩いて三分のところにある。昼間に通ってきたから場所は分かるけれど、ひとりでは行きづらい。

「暗いけん、おれ河野君のあと、ついてくわ」

「部長さんとか、呼ばんでいいんかね。おれらがホタル見てる間も働いておられるんでしょ」「そうやねえ、まあ、いいんじゃないかな」「いいんかね」河野君は歩きながらも、ずっと他の部員のことを気にしていた。気にはしてもふたりとも声をかけられないのだ。部長はよく働く人だったから、きつと闇の中で働いているだろうと思った。地域の高齢者の輪の中にもぱっと入って、白い歯を見せて笑う女性だった。たった一歳年上だったが、十年分くらいの開きがあるように思われた。提灯のおだやかな火のゆれるテーブルのそばで、相手に向かって次々明るくひらかれる笑顔の裏に、どんな表情が隠れているのかは分からないけれど、部長のような人になりたいと思う気持ち強かった。

ゲンジボタルの群れが、地面から湧き上がってくるように飛んでいた。光が草場や川の水をかがやかせていた。飛んでいるのはじゃれ合って、輪を作ったりした。光跡は数字やアルファベットに見えた。だれかのための暗号のようだった。あたりに集まる人はみな声をひそめ、光の道筋を追いながら、熱心に何かを読み解こうとしているように思われた。河野君は先に部長が来ているのを見つけた。部長は他の部員と笑いながら近づいてきた。

「河野君たちも来てたの」

「はい」

「感動するよねー」

感動？ その言葉に思考が止まってしまい、うなずき返せなかった。

「はい」

河野君はすぐに明るい声で返事をした。ホタルなどたいして見もせず、他の部員を見つけようと目をこらしてばかりいたのに、そういうことを言うのだ。

「まだそんなに見てないだらうから、うちら先に戻って仕事してるし、ゆっくり戻ってきていいよ」

「ありがとうございます。でも」

「いいよ、いいよ！」

河野君は「でも」の後に、何を言おうとしていたんだろう。ひとこともしゃべらずに、後ろでただうなずきながら、感動の意味とか、でも、のつづきを考えていた。

部長は部員を引き連れて戻っていき、すぐあぜ道の暗闇の奥に見えなくなった。会場の提灯の火が、ひとかたまりのホタルのようだった。人の声が遠かった。

河野君は何もしゃべらずに立っていた。さっきの河野君の明るい声がまだ耳の奥に残っていて、しゃべらないすがたが、余計に何かを語ろうとしているように見えた。河野君は目を細め、ポケットに手を入れて、急にホタルを見はじめたかと思うと、水辺に降りてホタルを一匹つかまえた。河野君の開いた手の中に虫がいて、触角をたえ

ず動かしていた。河野君の指のすきまから光がこぼれている。その光に、「おおっ」と言った。「おおっ」は精一杯だけれど、まだうそっぽかった。でも河野君はうなずいて笑った。

ホタルがぱっと飛び上がり、どこかの草に着地して、たくさんの光のひとつになっ
てしまうと、ホタルといっしょに何かを取り逃してしまったような気がして、しゃべ
らない河野君のあとを、しゃべらずにくっついて戻った。

河野君は感動していたんだろうか、と考えていた。けれど「感動した？」と声に出
して聞いてしまうことで、この往復がふたりにとって意味のないものになりかねな
った。自分だけならともかく河野君にとっても意味のないものになってしまうのは乱暴
な行為だった。それなら部長のように、「感動したねー」と笑って言えばいいのかも
しれない。

高校の同級生まではいなかったけれど、大学の同級生になると急に一年や二年の歳
の差が発生する。その差が河野君ともあって、河野君はストリートで来ていれば一年
先輩である。同級生には「君」をつけて呼ぶ、上の人には「さん」か「先輩」をつけ
て敬語で話す、というのが当然のルールだと思っていた身には、河野君との接し方を
見つけるのが難しかった。結局同級生ルールを適用し、「君」をつけて呼ぶことにし
ただけけれど、いつも喉の奥に違和感があった。堪えきれずに、ついこういうことを

言ったことがある。

「ごめんね、本当は河野君、一年先輩やから、敬語でしゃべらんといかんのやけど」
「別にいかんことはないで」河野君は笑った。人の笑いというものは、本当にはかりづらいものだった。「おれも、変に意識されるより、『君』って言われた方が、落ち着くかな。でもときどき思い出して、『さん』つけてしゃべってくれたらいいよ」

河野君も自分が年上であることを気にしているのは分かった。

ときどき「河野さん」と呼ぶのはたいへんに難しいことで、実はしょっちゅう思い出して意識していた。「さん」とは一度も呼べなかった。それなのに一度決めた「河野君」が自分の口から出されるたびに、河野君との仲が、ズレていく気がした。

ホタル祭りは拍手で終わった。会場の片付けは翌日に回された。暗いから、というより、主催者のお年寄りが、すでにろれつも回らない酔っぱらいだからだ。施設の建物に入って、またみんな飲み直す。成人している河野君はたくさん酒を注がれていた。

夜遅いけれど、タクシーで駅まで着ければ帰れなくはなかった。女性部員は帰ったけれど、部長は残って、酒を注いで回っていた。残った男らは日付が変わるまで会に参加し、そのあと毛布を借りて、きたない宴席のテーブルの下にもぐりこんで寝た。

どこかのおばさんの出した自動車が部長をあたたかい寢床まで運んでいった。お年

寄りも、おばさんたちがみんな拾い集めてしまった。エンジン音がいくつもずれて広場にひびき、遠くなっていくテールランプが窓から見えた。疲れきった部員たちは蝸牛のように丸くなり、しずかだった。

部員たちはすぐに眠ったらしい。眠気がすぐにやってこず、毛布の上から何枚も座布団をかぶり、膝の間に手をはさんで寒さにたえていると、背中を叩かれた。

「飯田君、ちょっと、外に出ん？」

河野君の顔が近くにあった。

「おれ眠れんけん、ちょっと付き合って」

だれも起こさないように、十分に気をつけたしゃべり方だった。毛布から這い出した。ふたりで足音を殺し、それでもきしむ畳の音に笑いながら、広場に出た。

提灯の火はすべて落とされていたというのに、だれもない広場は、祭りのときよりも明るく感じられた。周りに灯火がなければ暗闇に目が慣れるのだ。もう夏が来ているとはいえ、真夜中の風は冷たく、テーブルにさわると手のひらに露がくっついた。

「飯田君、やばい。ちょい、見て」

河野君が言った。河野君は空を見上げていた。

「えっ」

顔を上げるとそこには星空があった。空のすみずみまで星が満ちていた。明るいも

のも暗いものも、遠いものも近いものも、みなひとつの空の中にあって、その天を貫くように、青白い光の集まりが川のように流れているのだ。

「あれ天の川じゃね？」と言うと、

「そうだ、うおお」と河野君がうなった。

「星すげえ」と言うのと、

「すげえ！ すげえっ！」と河野君がさげんだ。

さそり座のアンタレスを見つけ、北斗七星を見つけ、はくちょう座を見つけていく。ふたりとも小さな声だったのだけれど、広場に反響して、ずいぶん大きく聞こえた。声は今まさに同じ空を共有している、ふたりだけのもので、中に眠っている他の部員たちには聞かれていないことになっていた。視界にうつらない者には、聞こえていないことになっているのだ。記憶の美化作用をまぬがれないのは承知の上だけれど、あの瞬間、これを感動と言ってもいいかも、と考えたのは確かだった。でもどちらの口からも、感動という言葉は出なかった。「すげえ」とか「やべえ」とか、たいしたことはないつぶやきみたいなものばかり、ふたりして空に放っていた。ただ、ホタルを見たときに感じられたようになうそっぽさは、どこにもなかった。そのつまらない言葉たちが、とくべつな空気を生み出していく気がした。河野君と初夏のしずけさの中を歩きはじめた。

「飯田君はどうするの。いい人いないの」

「ああ」この場では何でも言えるように思われた。「いるよ。おれ、七月になったら、告白しようと思っとる」

今までもろくにそのことを考えてもいなかったのに、言葉に出してみると一気に重みがついて、ずいぶん前から真剣に考えていたことのようになるのだ。

「えっ、やっぱりKさん？」

だれに好意をいだいているのか、部員にはだいたいはばれていた。Kさんはホテル祭りに来なかったので、昼の駅で男たちはみな「残念だね」という顔をして、それから笑った。

「ああ、うん、そう」

星を見つつ、広場を何周も行ったたり来たりしながら話した。

「飯田君がやるなら、おれもやりますよ。やってやりますよ」

「Y部長でしょ」KとかYとか、だれに知られるものでもないのに、ぼかして話す。

「え、ええ？ おれ言ったっけ」

「見てりゃわかるよ。まあ部長いい人だし、美人だし、いいんじゃないかな」

「そこなんですよ、部長さんはいい人で、美人さんでしょ。おれ、ほんとは部長さんと、同じ年やる。それで、話とかしてても、けっこう音楽とか、ヒップホップ好きや

って言うし、話が合うんよね。こっちがね、話振ると、楽しそうに話してくださいるんですよ。それでね、いいなあと思うんやけど、いい人で、美人だとね、ほら、彼氏さんとかね」

「いるのか聞いてみたら？」

「うん。そうなんやけどね」

「まあ聞けんよね。おれも聞けん」

「ふつうに話すのはできるんやけど、そういう話にね、踏みこんでくのは、ほら。おれ、緊張すると、どもる癖があつて。意識するとだめなんよね。今日も、何度も部長さんと話そうと思つたのに、いざつてなると、ちゃんとしやべれなくなつて」

「ああ、そっか」川辺での部長と河野君を思い出しながら聞いていた。

「飯田君はKさんと、もう、そういう雰囲気になれそうなんやろ？」

「や、Kさんが彼氏おるか、おれも知らんし。でもなんか、ちょっとやる気出た」

「うん、まあちょっとやる気出てるよ。うん、出てますよ、おれも」

こんな話をしながらふたりで一時間以上も歩いてた。

ホテルのいる川辺にも行ったが、早い時間に見たときの湧き上がるようないきおいはなく、草は眠るようにゆれていた。あぜ道の奥に見えた広場の灯りもなく、人の声もなく、ただしずかに何匹かのホテルが、今にも消えそうに飛んでいるのが見えるの

だ。

川辺ではふたりとも小声になった。

「ホテルの鳴き声って聞いたことないな」

「虫のコミュニケーション能力って、だいたいひとつで限界らしいね」

「限界？」

「うちの教授が言った、ひとつの説やけどね。コオロギは音、ホテルは光」

「なるほど。……そろそろホテルも消灯時間かね」

「まあ、虫も寝るけんね」

どちらがもどろうと言い出したのか、施設にもどって眠りについたのは確かだけれど、朝になってもまだ夜の延長で、天の川が意識にとけきらず、からだはふらついていた。

朝の片付けはほとんど役に立たなかった。お年寄りはずっかり酔いからさめて、機敏に動いていた。

軽トラックの荷台に乗せられ、駅まで運んでもらった。後で部長本人から聞いた話だけれど、部長は片付けの最中、なかば本気の目をした老人に、あんたうちの嫁にこないかと誘われていたらしく、「夜、お酒が入ってるときは笑って聞き流せたけど、朝になって真顔で言われるときすがにこわいよね」と笑っていた。河野君は、「それ

はこわいですね。でも先輩はほんと、すてきですから」と精一杯の顔で笑った。

その後、Kさんに公園で告白をした。人生で最初の告白で、何をどう伝えたのかもよくおぼえていない。河野君が部長に告白することはついになく、なくなったように見えた河野君とのズレは、時間が経つごとに深まってしまった。

まあ、飯田君はね、告白できる人やから。おれはできん人やから。顔を合わせるたびにホタルう言われているような気がして、河野君と話すことができなくなった。

Kさんに告白できたのは河野君のおかげだったと、一言でも言えればよかった。

四

何名かの同僚といっしょに、職場の飲み会の幹事を任せられるとする。だれかが役割分担を行う。会の場所や時間を決める人、みんなに都合を聞いて回る人、余興を考える人。

「飯田さん、幹事長ね」

と言われて「はい」と受ける。何でも「はい」と言ってしまうのだ。その仕事がどれほどの大変さで、どれほどの重みをもっていて、先にどんなものが待ち受けているのかをろくに想像することもなく、「はい」と答える。さて幹事は動き回り、場所や時間が設定され、出欠席が確認され、余興はすっかり考えられてしまった。飲み会の日

がもう明日に迫る、という段になって、まだ何も幹事としての責務を果たしていないことに気がつく。幹事長とはいったいどういう人なのか、何をしなければならぬのか、ちょっと考えて、考えるのをやめて、日々の仕事で上から蓋をしまっていた。

「すいません、なんか、みんなやってもらって」

「いいんですよ」

年配の同僚たちが給湯室で、飲み会のようにみんなを笑わせる必殺のジョークを考えているとき、その場において、ろくにネタを提供することもできず謝っているすがたを情けなく思う。

「当日くらいはきちんと仕事したいんですけど、幹事長って、何すればいいですかね」

「最初の挨拶かな。あとはどっしりかまえてくれてたらいいよ」

「いやいや、それじゃ申し訳ないので、お酒注いだり、注文したりしますね」

「うん、じゃあ、そうしてくださいね。まあわたしたちもやりますけん」

当日の挨拶は紙に書いてきた。立ち上がると、座がしずまりかえった。同僚十五人がこちらを見上げているのが分かった。となりに座っている同僚が、テーブルの下に隠した紙をのぞきこんで、ふっと笑った。

「本日は、お忙しい中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。(一礼)」

今年度も始まって三カ月経ちました。さて、今日ここにいらっしやるみなさんの、明

るい表情を見ていますと（場をのぞきこむ）……ってあれっ、暗い顔の方もおられま
すか？ ああ、照明の具合でした、失礼しました。（笑い）みなさん今年度も、順調
なスタートを切ることができたのではないかと勝手に思っています。さてさて、暑い
日が続きます。今日は暑気払いとして、このような会を計画させていただきました。
途中には楽しいゲームもありますので、どうぞ最後までお付き合いください。では乾
杯のご発声を、山下部長に……」

何もしていない人間が、計画させていただきましたと、自分の手柄のようにしゃべ
ったことを後ろめたく思いながら過ごす飲み会だった。幹事役をつとめた同僚はみん
な、だれかの酒がなくなるのを察してすぐに動いた。料理を注文したり、ひとりでい
る人を見つけて声をかけたりしている同僚を見ているばかりで、なかなか腰を浮かせ
ず、かたまってている。この仕事に就いてもう六年目だというのに一年目から変わらな
い。

社会人の飲み会を窮屈だと、遠くにいる友人に訴えたこともあった。「なんであんなに酒注いだり、あいさつして回ったりせにゃいかんのだろうね。もっと気楽にできりゃいいのに。おれだったらその方が楽しいけどね」

友人はうなずいてくれたけれど、酒を注いだり、あいさつをしたりすることが大事なのではなく、だれかのことを考えること、気を遣うということが大事なのかもしれ

ないと思うこともある。みんながなるべく気持ちよく終われるように気を遣う役目としての幹事が必要なのだ。そういう幹事ができるような人間になるだろうか？ 今は気を遣われてばかりだ。一方で、役目って体のいい言葉だな、ただの人身御供だろう、幹事は気を遣われなくてもいいのか？ とお思っている。

「政樹君は誠実な人やね」

妻の実家ではそう評されているらしい。誠実な人ってどんな人だろう。誠実の項を辞書で見ると、「私利私欲をまじえず、真心をもって物事に当たる心」というような表記。真心とはなんだ。「偽りや飾りのない心」そんな高尚な心をもちあわせているだろうか。大学でひとりさがしをしていたころから十年経ってもなお、見せようとする自分と、見せられる自分の間に距離がある。どこまでいけばびったりくるんだろうと考えている。こんなことを考えている人間が一方では毎朝、仕事に行きたくなくて、布団にもぐりこんで愚図っている。仕事につながるから読んだ方がいいと上司から薦められた本など、その場では「読んでみます」と言っておきながら、読んだことはない。誠意を見せようという思いに行動が追いつかずにいるうち、誠意の意味すらはかりかねている。

「でもわたしも、誠実な人だと思っよ」

妻に言われて、そうか、と思う。「それって、どういう人？」

「うーん、言葉では、うまく言えないけど、そう思う」

「説得力ないな」

「でもそう思う人が多いんだから、ほんとにそうなんじゃない」

「そうかねえ」

目の前に妻がいるというのはふしぎなことだった。大学に入学する前、バスの運賃もまともに払えず、並木道をひとり歩いていた人間が、十年後に妻と同じ部屋で暮らしている。この生活が明日も明後日もつづくだろうという確信をもっている。

目の前から消えてしまった人間ならずいぶんいる。携帯電話の電話帳に記されたアドレスや電話番号は今、連絡を取り合うこともできず、つながったとして、どんな顔をして話せばいいのか分からない、曖昧な人間たちを示す記号ばかりだ。どこかの空で星がひとつずつ人間に知られず死んでいくように、この人たちが死んでも気がつかないんだろうと思う。消灯された記号の列の中にまだ灯っている記号はほんの数えるばかりで、濃くかかわりのあった人ならまだ記憶の中で動かすこともできるけれど、これらも更新されることはなく、そのうち脆弱ですぐに消えるデータそのものになるんだろう。

大学一年生のころ、熊田君という人が近くにいた。

教育学部生の男たちがかたまって、缶コーヒーを飲んだり、煙草を吸ったりしてい

る。その横をすり抜けて教室に入ると、ひとり、前列窓際の席で本を読んでいる人がいた。前からこの人はひとりだと感じていて、何度も声をかけようとし、かけられずにいた。その人が熊田君という名前で、同級生なのは分かっていた。まだ教室にはだれもいなかった。今だと思った。急ぎ足の靴音が、やけにひびいた。熊田君のうしろの席にかけた。

肩を叩く力が弱くなって、叩く、というよりも、つつく、になった。

「はい？」

この人はこんな声をしているのか、と思った。想像よりも低い声だった。ずっと腹のうちであたためていた言葉を、大学に入ってはじめてぶつけることができた。

「よかったら、友だちになりませんか」

「はっ？」

「いや、おれ、大学入ってから、まだ友だちいなくて」

「おいおい、『友だちになりませんか』って聞かれたのは初めてだなあ。友だちって、そういうの言わずに、なるもんなんじゃないの」

熊田君の言葉をだまって聞いていた。窓からの光が机にはねかえり、まぶしかった。

「おれ、そういうの言われたことないから、なんて返せばいいのか分かんないね」

「メアドの交換とか、どう？」

「まあいいけど……」

教育学部の同級生の多くは小さな手さげ鞆に、最低限のものしか入れなかったけれど、熊田君はいつも大きな黒い鞆を斜めにかけて、重量感たっぷりゆらしつつ、並木道を早足で歩いていった。だれよりも早く教室に来て本を読んでいた。

熊田君はだれかと話す様子もなく、こちらから話しかけようと思ったときにはいなくなっていたけれど、あとで、「メシを食おう」と短いメールが来ることがあった。

熊田君の話には「新潟のやつら」がよく出た。新潟のやつらは熊田君といっしょにロードバイクで山々を走り、夜にはテントを張って、すばらしい星空を見たんだそうだ。家には大好きな漫画や小説がたくさんあるので、熊田君の家には、本を読みに来る人が絶えなかったとか。新潟のやつらと夜に話すんだと言う。

「山根ってやつがいて、こいつがすげえ変なやつなんだ。電話越しでも十秒に一回は笑わされるんだよな」

「へえ」

新潟の話をどれだけされてもよく分からなかった。熊田君は島根にいても、島根にいないように見えた。新潟の話以外を聞きたかったけれど、「他の話は？」という類の言葉が、どう考えても棘を含んでしまうような気がして、何も言えず、ただ相槌を打っているしかできなかった。熊田君は食べ終わるとすぐに、「先に出てるわ」と言

い、重たそうな鞆を持ち上げて、次の教室に行ってしまった。

河野君やKさんのいるサークルに入ったのは、熊田君と話すようになって二週間くらいのところである。五月になりかけていた。決心をつけてくれたのは熊田君で、かれは二週間経っても、いっこうに新潟のやつらの話をやめなかった。それでも少しづつ人に話せるようなストックは減ってきたみたいで、ふたりで飯を食うときは沈黙の間がずいぶん増えた。箸やスプーンの食器に当たる音や、熊田君の食べるカツが齒にちぎられる音などを聞きながら、どうしてこんなつまらない音を聞いているんだろうと思っていた。こんな状態では、自分はもう教育学部ではまともにやっていけないだろう、と思いつながら食べていた。

熊田君はいつも先に食べ終わった。

「おれ、先に出てるわ」

「ああ、うん」

熊田君はろくに息もつかないうちに立ち上がると、鞆を持ち上げて肩にかけた。

「じゃ」

「うん」

熊田君が去った後、かれの座っていた椅子の近くに一冊のノートが落ちていたのが見えた。拾い上げて表紙を見ると、題名のない無地のノートだった。下に小さく書か

れた「S・K」が、熊田君の本名をあらわすイニシャルだと気づいて、食堂を見回したけれど、かれのすがたはもうなかった。後で返そうと思いつながら、ノートを開こうとする手を止められなかった。そこにはずいぶんかわいい字で詳細に料理の献立や食べたものの記録が書かれているのだった。毎日の摂取カロリーや、自分の作った料理のレシピなど。いっしょに食べた店のことも書かれていて、細かい絵や色も入っているのは意外だった。なるほど、と思つて熊田君のノートを閉じ、そのまま鞆に入れて帰った。

何度も開いては閉じたサークルの名簿をもう一度開いた。ここなら大丈夫だろう、怖い人がいないだろう、いっしょに楽しく話せるだろう、という雰囲気、紹介の文面からなんとか読みとろうとした。その結果が環境系のボランティアサークルだった。一時間以上も部室棟の前でうろつき、ようやく入った部室には人がおらず、金魚だけがいた。入部希望者はこちらへ、という貼り紙があり、そこに部長の番号があった。

一度気持ち折られていたので、もう一晩迷つて、迷ったあげくにかけた。電話はすぐにつながった。

「あの、飯田と言いますけど。あの、サークルへの、入部希望で」

「電話してくれてありがとう！ わたし二年生の山本って言います！」

その瞬間、世界がぱっと明るくなったような気がした。

「今日は夜に定例会があるから、みんな集まるよ。そのあといっしょにご飯でも、どうですか」

その日のうちにサークルに入ることが決まった。

河野君や他の部員と過ごすようになる、熊田君とは話をしなくなった。相変わらず教育学部内ではひとりですごしていただけれど、ひとつ落ち着ける場所ができたことで、ずいぶん気持ち楽になった。ノートはずっと鞆に入れて持ち歩いていただけれど、熊田君に渡せなかった。「この前、これ落としたやろ」と声をかけることができずにいるうち、どんどん日が経った。熊田君を見つけると、気づかれないうちに隠れるようになった。そうすることでわずかな罪が少しずつ大きくなっていく気がしたけれど、サークル活動にのめりこんでいくことで心をだました。熊田君からはまだ「今なにしてんの」とか、「メシどう」とか、ときどき短いメールが来た。ノートについてふれるようなメールは一度もなく、こちらからもしなかった。何度かはメールを返したけれど、そのうち、こちらからのメールも短くなった。

「熊田君、サークル入った？」

「別に。飯田君、メシどう」

「ごめん、今日は無理」

「あ、そう」

前列窓際で本を読んでいた熊田君は、ある日大学からいなくなった。いなくなったことにすらしばらく気がついていなかったし、いなくなったこともすぐに忘れた。「どうして？」とメールを打ったところで相手も困るだろうと思われて、しなかった。熊田君のノートは大学を卒業して関東に引っ越すときに久々に見つけた。そのときに捨ててしまった。

熊田君のアドレスが消灯して、もう十年になる。あのころサークルでいっしょだった人たちも、今はほとんど消灯している。河野君や部長と連絡を取り合うこともない。相手にとっても同じだろうと思う。こちらが死んでも気づかれぬままに、ただ記号だけが、相手の電話帳に残っているんだろう。それは仕方のないことで、生きていても死んでいても、ことさらに多くの人とつながって迷惑をかけなくていいと思っている。でも熊田君の大きな鞆の中身について、もう少しきちんと聞けばよかった。【了】

エターナル

あんな

彼女は切り刻んだパイナップルを口に挟みながら母親から届いた手紙を手の中で一度くしゃくしゃにしてからもったいなさそうにゆっくりと開いて、その手紙の内容を頭の中で音読し終わるとルームサービスでアイスクリームアソートを頼んだ。このホテルは一体どれだけの大ききなのか把握できないくらいに巨大で、ワンフロアだけでも端から端まで見えない複雑な作りをしていたので中を歩いているだけで迷宮に迷い込んだのではないかと思わせるほどだった。等間隔に並べられたドアから漏れ出てくるテレビの音とシャワーの音とスリッパを絨毯に擦る音がかすかにきこえてくる夜の時間帯に、地下のプールに行くことも考えたがホテル内で迷子になりそうだったので大人しくクイーンサイズのベッドの中からだを埋めたままテレビを見ていた。暗い室内を白い光が眩しく照らし、わずかに開いたカーテンの隙間から差し込んでくるヘッドライトや信号の点滅する光と混ざり合いながら目の前を横断していく。バスルームから湿ったタオルと歯磨き粉の匂いが濃いベッドシートにゆっくりと染みこんでいった。

突然電話のベルが鳴ると室内が震動し、声の束がまとまって耳の奥に詰めこまれた。

会話の断片がくつき合い絡まって目の前に広がる。受話器の奥からきこえる声はノイズに包まれ相手のいる場所を想像する前に街中にいるのだなどということがわかった。少し焦っているようにきこえたので、少しずつ会話を組み立てながら直接会って話したいことを伝え、やっとホテルのロビーで待ち合わせをする約束を取り決めてから時間まで髪の毛をワックスで整えているとノックの音が鳴った。ドアを開けると真新しい真っ白なエプロンを着けた女性が立っていて、無造作にベッドサイドテーブルに三種類のアイスクリームが乗った皿を置いて早足でドアを開けて出ていった。彼女はカーテンを開けて窓の縁に浅く腰かけて、眠ることなど忘れたような街の喧噪を眺めながらチョコレートアイスにスプーンを入れた。誰も上など見ようとしないので人々の頭だけがピンボールゲームの玉みたいに転がってはぶつかって四方八方に弾かれて飛んでいく。窓に息を吐いて薄く広がる黄色と灰色が混ざった雲の上に月の絵を描いてまた消した。一着だけ持ってきていたローズ色のドレスにフェイクファーのコートを羽織ってから部屋を出てロビーに向かうとそこではカルテットの演奏が始まったばかりで、幾人かの宿泊客がまばらな拍手を送りながら座るには大きすぎるソファアの上で時間を持てあましウエイターにドリンクを注文したりしている。しばらくチェロを弾いている男の足の動きを眺めていると、長身で薄汚れた埃っぽい服を着た男が目の前に現れ急に演奏にのって足を動かし始めた。男の顔は目の周りがぐるり

と落ち込んで、クマに覆われた下瞼は暗く深い影を落としていた。彼女はわざと男の顔を見ないように努めていたが、ふとした瞬間にもう一度目に入ってきた男の顔はまぎれもなく彼女が知っている顔だった。ざらりとしたその浮き上がるような目は、彼女の中に立ち現れた記憶の中の人物像と咄嗟に一致しなかった。確かに全体を見るとそれは彼女の弟であり、ブツクサと呷くような話し方をきくと何も変わりではなく彼であることがすぐにわかるのに、一瞬とはいえ気づかなかったことが不思議でならなかった。

「久しぶり」

彼はやはりその顔からもわかるように寝不足のようでふらつく足でソファーに体を押しつけるようにして腰掛けながら言った。

彼の革靴は擦れて薄くなり足の指の形が浮き出て見えそうなくらいだった。母親からの手紙で彼が結婚して子供ができたのだということを知った。そしてその子供が男の子だということ、まだやっと少し言葉を話すようになったばかりだということも書いてあった。実際には彼女は手紙を見なくとも一字一句間違えずに何が書いてあったか言えるくらい手紙を何度も何度も読み返していた。手紙の文章には妙な切迫感があつて昔よくきいていた母親の口調とはまったく異なつた調子の記事だつたからだ。読んでいくうちにまだ子供だつた頃の二人が目の前に現れてくるような気分になつた。

それはあたたかく、しかし時に指先に刺さった棘を抜こうとするような痛々しさもあった。彼女はひよんなことから静養に訪れた土地のたまたま入った巨大なホテルのバスラブで、封を開けずに鞆に詰め込んできた手紙をおさぼるように読んでいた。

五年ぶりに会った彼を見てうまく目を合わせることができずにいた。一言目をどう発すればいいのかわからないまま時間をやり過ごすためにバーに行ってお酒でも飲もうと彼を誘った。ホテルの地下一階のバーでは土曜のためか席がほぼ埋まるほどの客が財布にたっぷりと金を用意して陽気な顔をして飲んでた。旅行者や短期滞在者特有の、少しだけ孤独を感じながらも不思議な高揚感に包まれた表情だった。普段感じていた時間軸や自分という殻を捨てて見たこともない景色や匂いの中に身を置くと、自身がただ一人の人間にしか過ぎないという決まりきった安心感みたいなものを感じていられない。皆様に同じような表情で音楽に合わせて踊ったり酔いっぶれて恋人の肩にもたれたまま眠っていたりする。二人でウイスキーを飲みながら、だんだんと酔っぱらっていく彼の横顔をずっと眺めているうちに、いつか「家族」という名で囲われていた二人のことと、「あらゆる場所に存在している他人としての二人」のことについて考えていた。実際に、五年間の間「家族」という名前を取ったらまったくの他人になってしまいうくらい二人は一度も連絡を取ることはなかった。

実家から持ち出してきたビンテージのギターを売った後で引き換えた金をそのまま財布に突っ込んでから、安い白ワインの小さいボトルを買って公園のベンチに座っていた。友人の家に身を寄せ、昼間は何もすることもなくただただ何かに憑りつかれたように歩き回っていた。そのうちに彼は薄い粘膜の中にいるような息苦しさを感じ眠れない日々が続いていた。考えなければならぬことが多ければ多いほど何もせずに過ぎていく日々は、誰も手の届かないところに積もる埃のように厚くなり、本来の姿がよく見えなくなっていてそこが一体どこだったかもわからなくしてしまう。しかし、何故か今日は気分も良く動くなら今日しかないといった不思議な気配が自身の中にあつた。こうやって座っていると彼はいつも周りにあるものの数を数える癖があつた。植物の本数を数え、足元に生えている雑草の数を数え、空を見て雲の数を数えた。そして遊具のタイヤの数を数えているうちになぜかからだがブルブルと震え始めた。買ったばかりのワインの蓋を開け、飲み干すと震えは止まり、指先からわずかな温度がのど元まで上がってくる。温度が戻ってくるのからだの中で得体の知れないエネルギーのようなものが充満してくるのを感じた。そのまま立ち上がり剥がれそうな靴底を引きずってゆっくりと歩き出した。一体自分が何を求めているのかわからずに、ただ今日何かに決着をつけなければならぬ、という強い強迫感が足をどこかに動かしている。歩いているとわずかながらその理由が頭の中に少しづつ浮かび上がってきてひ

とつの生き物のように目の前に現れ始めた。その瞬間急に足取りは軽くなり偶然立ち寄ったフラワーショップでポケットに手を入れて入っていた金を全部出してから息子と同じ目の色の藍色の花を使って花束を作ってもらった。「お祝い事ですか？」ときかれたので息子の誕生日だという。「おめでとうございます」と言って店主はにこやかに笑い真っ白いかすみ草を雪のように花束に散らした。花束を持ってそのまま友人の家に帰るとテレビをつけ音量を最小にしてからコーヒーを一杯入れてゆっくりと飲んだ。最後のひとくちを飲み終わってから突然目の前の光景が薄くぼんやりとしてきて部屋の中に霧がかかったように見えた。それを合図とするかのように立ち上がってそろそろとバスルームへ向かい湿っている床に花束を置いてから、履いているジーンズからベルトをするすると抜き取ると、シャワーカーテンのかかっているボールにくくりつけた。

友人の家の階段の下で目を覚まし身を屈めて立ち上がりとしたが目眩を起こししばらく横になっていることにした。友人はまだ眠っているようで上の階からはウサギの鳴き声のような寝息が細くきこえてくる。外はいよいよ冬の気配が濃くなり窓を通して骨を冷やすようなきんとした冷たさがこちらまで漂ってきて毛布を目の下まで引っ張った。ぼんやりとした頭の中でくすぐったいような途切れ途切れの笑い声が

きこえ、それがかつて自分の元にあったことを不思議な夢に包まれているかのように思い出していた。息子のことを思い出すたびに彼は自身の子供の時のことを自然に思い出す。彼はひどい癩癩持ちで子供の頃は毎日のように泣き喚いていた。夕飯のメニューが食べたいものではなかった時、天気が悪かった時、独り言を誰かにきかれた時、話しているのに視線が合わない時、部屋の絨毯にジュースをこぼしてしまった時、何だって彼にとっては苦痛の原因になりえた。泣き喚いている間中、世界がぐらぐらと崩れ落ち、からだに何か重い液体でも入れたかのように内臓が膨らみ、呼吸は荒く速くなった。一人だけ人よりも数段階の下へ落ちたような気持ちが続く、声をあげても声は音にならずに誰もこちら側には気づかず、ちりじりになって行ってしまふような寂しさを感じていたのを、机の内側から湧き出るように記憶していた。しかし彼が十七歳になった年の春、癩癩は突然消滅した。まるで世界がボタンと折りたたまれて別の面が表になったような感じだった。二十五歳の時に生まれた彼の息子は、誕生したその瞬間から寝ている以外は常に泣き続けているような子供で、看護婦も医者も顔をしかめるほどだった。見事なまでに彼の子供の時と同じように癩癩を起こし泣き喚くたびに、彼の妻はあたふたとしながらも困惑したままうろろとするばかりで表情には疲労感が広がっていた。家中に途切れなく響き渡る泣き声に近所から苦情が出るほどだった。そのような状況だったために彼が息子のことを思う時、彼自身の

ことを考えるのは自然なことだった。もしかしたら自分が記憶しているあの苦痛や寂しさと同じ種類の感情を息子も感じているのではないかと思うたび落ち着かず、いつかは息子にも突然世界が反転する時が来るように祈ることしかできなかった。そんなことを思ううち、いつしか反転した自身の片一方が息子の中に入ってしまったような気がして申し訳ない気持ちと安心した気持ちとが一緒になってふつつつと沸き上がってくるのだった。

息子のことを考えているうち彼はまた眠ったようだった。久しぶりに眠りについた日は引っ張られるように深い眠りに落ちる。息子が自分の手を取ると妻が血相を変えてやってきてばちんと息子の手をはたき、息子はその場にへたりこんで大声で泣き喚き周囲の人々は怪訝そうな顔で見えぬ振りをしている。妻は今にも泣き出しそうな顔で「静かにして」と噛み殺すような声で言い、その場を立ち去った。息子はさらにきーんと耳の鼓膜を刺激する声で泣き叫び、走り去る妻の後ろ姿に向かって手を伸ばす。言葉を話さないはずの息子が突然こちらを見て、「なんで?」と言った。腫れた眼の間からうっすらと涙の筋が線を作って流れている。

彼は急に怖くなり後ずさりするとまだ歩けないはずの息子が突然立ち上がり、「どうして?」と言いながらこちらに歩いてきて彼の左肩に寄りかかってきた。彼は息子の肩を抱いて引き寄せ、彼の涙を拭おうと頬を手で包み顔を見ると妻と妻に抱かれた

まだ幼い息子が冷たい視線で彼を見ていた。

二人は店内の真ん中に乱暴に置かれている大テーブルの端に並んで腰かけていたが、しばらくして彼が背中が痛いと言い出したので壁際のソファに移動し、その後で彼はテーブルに突っ伏して眠り始めたので彼女は一人お酒をちびちびと飲みながら座っているしかなかった。くつきりとクマを作って朦朧として酔っぱらっている人間を起こすわけにもいかず、どれくらいそうしていたのだろう、だいたい時間が経ったよう一人で、また一人と客が減っていく、店内の音楽も早いものからゆったりとしたものに変えられていた。そろそろ起こしてもいい頃だろうかと思いつつと手を置こうとした瞬間、突然彼はばさりと両手を下ろし、足に瞬時に力を入れ踏ん張った姿勢で立ち上がると一息大きく息を吸った。まるでそれは赤ん坊が生まれて泣く前に初めて空気を吸う時のような呼吸だった。その後足の力を失い膝を床に強く打ち付けて倒れそうになったので慌てて彼の脇に腕を入れ支えた。

「ごめん」と一言言った後、しばらくじっと焦点を合わせているようにして一点を見つめてから「悪いけど水を貰ってくれないか」と言うので眠そうにして立っているウイターに水を一杯頼んだ。

「最近よく息子の夢をみるんだ。それでだいたいこうやって眠ってから一、二時間す

ると飛び起きちゃうんだ」

彼が動く度にポケットの隙間からわずかにじゃらじゃらという小銭の音が虚しくきこえてきた。

「今日ここまで来るのも大変だったんじゃないの？」と彼女が言うと、たいしたことないという風に左手を振ってから「辿り着けてよかったよ」と言った。

「ねえ、このホテルいいでしょ？ 何泊かしていかない？」と彼女は大げさに手を広げて目を丸くして言った。

金色の光が点滅するやけに暗い赤い絨毯の敷かれた廊下を歩いてエレベータに乗り地下まで降りると、高い天井にどこかの城の内部についているような大袈裟なオレインジ色の照明がぶらさがっている。プールの下から光を当てているのか青く浮き上がった水がやわらかいゼリー状の液体のようにゆらゆら揺れて、その表面には照明の黄色い光が眩しいくらいに反射してくっきりと映っている。彼はめずらしいのか着替えてすぐにプールサイドにあるデッキチェアに横たわった。彼女は買ってきたサイドダーにストローを入れて一口飲んでからサイドテーブルに置くと彼の隣りのチェアに横になって目を閉じた。彼が天井を見上げながら「声がすごく響く」と言って突然大きな声でサウンドオブミュージックの「さようなら、ごきげんよう」を歌い始めた。

幸い室内には二人以外に人はいないようだったので彼女は歌に合わせて小さく手拍子でリズムをつけた。

「これ、昔よく歌ったわね」

広い塩素の匂いの広がる室内に彼の解放されたかのようなエコーのかかった伸びやかな歌声が放たれ、生あたたかい空気を混ぜながらゆったりと波打たせた。

太陽も眠りについて私ももう眠る時間ね、

さようなら、ごきげんよう、

おやすみなさい、

さようなら、

さようなら、

さようなら！

歌い終わると同時に彼は水の中に勢いよく飛び込み子供のように足をばたつかせた。黄色とオレンジの光の粒がしぶきと共に弾け飛び、空中を華麗に舞い、その中心に確かに見たことのある少年の恥ずかしそうな笑みが浮かんでいた。彼女はサンダルを脱ぎ捨てプールに向かって走り、思い切り飛んだ。

エターナル

(了)

連

載

I believe your brave heart

常磐誠

(第三回)

三・とある外野の目線

寺隴尾じるみのゆめタウンから自宅までは良いランニングコースになる。ここを走り込んでいると、自分と変わらないくらいの若い年代からお年寄りまで、たくさんの人を見かけることができる。

そのランニングコースの中、綺麗に舗装されたアスファルトをできる限り避けた芝生の道を瀧中勇邁よしなかゆうまは走っていた。

百八十を超える身長と、百キロを超す体重。ウエイトを考えた時にアスファルトは負担が大きいとかかりつけの医者や父親、更には真由実にまで言われたことを、勇邁は律儀に守っていた。

勇邁からしてみても、ある程度の柔らかさと不安定さを持つ場所の方が、足腰を鍛えられて良いと思えたのだ。

芝生を抜けて、足を隣町、自分の家がある宮ノ訪みやのわへと向ける。信号も横断歩道もない道路を渡るためにタイミングを窺う。その間も、足は止めずにステップを踏み続ける。ウインドブレーカーの中で、汗が出ているのがわかる。

宮ノ訪橋には青緑色のアーチが掛かっている。数年毎に塗り替えられる色も、今はぼやけたような色合いになっていて、そろそろまた塗り替えの時期になるだろうか、と勇邁に思わせる。それを見上げながら、緩やかな上り坂を、膝のクッションを意識しながら走り続ける。その息は乱れることなく一定のリズムを保ち続ける。

橋の終わりがそのまま宮ノ訪への入り口となっている。突き当たりには大きな布が張り出されていて、

『おめでとう全国中体連相撲大会出場！』

宮ノ訪中学校一年 瀧中 勇邁君』

と大きな文字で自らの名前が飾られている。正直なところ、勇邁はここを通る度に気恥ずかしさを感じてしまい、即座に隣の看板へと視線を移してしまう。

『祝！ 全国中体連卓球大会出場！』

宮ノ訪中学校一年卓球部 百合神 望君

永守 豪君

瀧中 椿さん』

宮ノ訪中に相撲部はなく、勇邁は幼い頃からの実績等により認められ、特例として個人戦のみの参加が認められている。たった一人の相撲部員としての参加。相撲部とも書かれることはなく、クラスや別学年の人間達からは、相撲、という響きだけで失笑を買うことも珍しくない。

相撲なんて今時流行らない。それは勇邁本人からしても当たり前過ぎることだと思えていた。

相撲で全国に行くこともはっきり言ってその意味をあまり大きく感じたりはしない。同学年、というより同年代と言う方が正しいが、似たような年齢の奴らとやり合ってたって仕方ねえ。勇邁はこの看板について周りに褒められる度にそう思ってしまう。その横の奴らはそうじゃないことを知っている。

競技が違う以上、それはどうしようもないことだと頭ではわかっているし、それほど、バカじゃないとも思う。それでも、勇邁の中でこの三人の力というものに対して、素直な憧れ、というのか、よくはわからない感情があった。

大人たちに交じり、そしてそいつらを吹っ飛ばす。そういうことができるこの三人に、勇邁は心から思っていた。すげえよ。こいつら。

だからこそ、……些細なことでも何をやっているんだと、勇邁は望や豪に対して残念な気持ちを抱かずにはいらなかった。

よく父親が話をしていた。「げな話で人を判断するな」と。

学校では噂話を耳にする。噂話だ。興味などなかった。それでも、よく耳にする。つまらない話だと一蹴しても、それは否応なく耳に入り、勝手に頭に入ってくる。

「すごいよねえ。望君も豪君も全国出場やろう？」

「けどあんましよくない話も聞くよねー」

「何？ 何々？」

「それがね、私も人から聞いた話だから、よくわからないんだけど、永守君はね、なんか相手の人に団体でやられまくって、それですんごく落ち込んでいるらしいよね」

「そうね？」

「そうそう。んでね、その人とはまた個人戦で当たったらしいっちゃけど」

「うん」

「そこでは手加減されて勝ったげなよ」

「マジでね？」

「いや、聞いた話なんだけどね。けど、ほら、最近あの二人、仲悪くなっているじゃ

ない？」

「あーね」

「やっぱそういうの、とか？ 団体でも足引っ張ったっていうのとか色々あって陰悪とげな」

「うわー」

どこにいても、こんな調子なのだ。話が広まるのは早い。中体連の試合は大概の試合が同じ日程で行われる。相撲の試合をしていたから勇邁は望や豪の試合を見ていない。他の連中もそうなのだろうが、噂の広がるのは本当にあつという間だった。

「ねえ。そうなんでしょ？ 勇邁君も知ってるんしょ？ 幼馴染なんだから！」

噂の真偽をこんな風に問うてくる者も多く、本当にウンザリしていた。その度にこう答える。

「知らん。俺はげな話は好かん！」

図体のでかさも手伝ってか、大概の相手はこれだけで引き下がる。それ以上話を続けるのなら、一睨み利かせれば良い。中学相撲の全国大会出場者に、そうそう喧嘩を売る馬鹿はいない。

「おおこわ」

「けど、火のない所になんとかやら、ってやつでしょー」

そういう風に軽々しく言葉を放つ奴らに対して、勇邁はイラつきや嫌悪の感情を持っていた。イラつく。両の手を組んではパキポキと音を立ててその場から離れる。

人伝で知るしかなかった話だ。望と豪がつかみ合いの喧嘩をしたことを親父から聞いた。そしてそのすぐ後に見た望と豪の顔面には互いに殴り合ったであろう形の痣があった。

「詳しいことは僕からは話さんぞ。本人達からも聞く必要はない。まあ、あの二人、特に望なんか絶対話す訳がないし、お前がそうして強引に入っていくべき問題でもないだろ。くだらんからな」

自分に対してだけ、父はあっさりと流すように話しかけてきて、そしてすぐに終わらせた。どこがどうくだらんのかは、これっぽっちもわからなかった。本人が話したくない、というのなら強引に割って入っていくのも違う。そう思う。

自分としても我関せず、でいたかった。だが、学校でこうして日々過ごしているとどうしても噂が耳を突く。ばかばかしい。げな話なんて、ガチでばかばかしいじゃないか。

「はぁーあ」

溜め息一つ、ついてみる。どうしようもない。何も起こらないし、変わりゃしない。

二人とはクラスが違う勇邁は、普段のこと、例えば授業中とか、部活動の時間の様

子だとか、そういうことはわからない。挙句体調まで勝手に崩しやがった豪には、そう簡単には事情を聞き出すこともできないだろう。望は論外だ。あいつは、……：自分のことしかわからないし、そして、自分のことだっていうのに、興味のないことについては何も意識が向きやしない。

「親父はくだらない、って言うけどなあ……」

くだらない、と思えるまでに自分は事情も知らないし、親父程年だの経験だのがいつてる訳でもない。自分に何ができるか、とか何も具体的に考えることもできないまま、勇邁は幼い頃から通い続けている相撲道場で四股を踏み続けていた。

相撲は、実に単純だ。簡単だ。強いが、弱いかだけで良い。それは他のスポーツとかでも一緒かもしれないが、土俵の外に相手を出すか、倒せば良いだけ。何も考えなくて良い。単純だ。

「これは……、中学で留年もあり得るかも、知れませんか……」

担任が四月の家庭訪問で苦笑しながら発した言葉に、勇邁は本気で焦った。いやいや！俺親父から中学には留年はないって聞いてるんすけど！と必死に慌てふためいていると、親父も担任も大爆笑していた。

よくよく話を聞けば親父から事前に頼まれて担任が芝居を打っていたのだということを知り、勇邁は父親や担任につかみ掛からんとする勢いで立ち上がったのだが、

逆に父から容易く叩き伏せられてしまった。あれから三ヶ月は経っているが、成績は案の定上向きになることはない。

とにかく自分は頭が悪い。馬鹿だ、ウマシカだ。と諦めきっているのだが、相撲はわかりやすい。力で全てを決められる。

強くなれば強くなる程、自分も、親方をはじめとする周囲も、喜んだし、そして嬉しかった。

そこもきつと、あいつらと同じだと思う。いや、どうなんだろうな。望の考えていることは確かに読めない。理解できない。だから、

「ねえねえ！ 百合神君って永守君とケンカした時にナイフまで使ったげなね？」
とかいう訳のわからない話が飛び出してしまったりもする訳だ。

もはやネタでしかねえな、と自分の三つ子の兄である勝が鼻で笑いながら言っていた。

もう一人、姉の椿が望や豪と同じクラスにいるが、こっちは本当に何も言わなかった。少し聞いただけで、露骨に睨まれ、舌打ちまでされた。弟なのだから立場的に当然といえばそれまでだが、身長差も三十センチ弱、体重に至っては二倍以上にもなる大男に対してすごい意地というか、性根をしているよな、と思わずにはいられなかった。

それでも、切り出した。

「なあ。望のことなんだけど、さ」

面白いくらいに固まる空気と、チッ！ という舌打ち。そして余計なことを言いやがって。そんな勝の目線が刺さる。

「お前がかたる話題じゃない」

親父よりも先に椿が切り返してくる。まるで、お前は参加するなどと親父に言われただろう、と優しく、しかし首筋にナイフかドスか何か、物騒なものを押し付けるような雰囲気では俺に言う。親父は俺にだけ「お前がそうして強引に入っていくべき問題でもない」と言った。そのことは親父と俺しか知らないことだ。でも、椿は知っていたのかもしれないと思った。知っていて、一々出しゃばらないように、していたのかも。昔からそうだった。この女は、小さい頃から俺に対しても勝に対して、も、——そして望に対してもそうだった——距離感を保った優しさで、首筋にちらつくドスのようないかつき、危険さを、同居させている。

「……………」

親父は口を開かない。黙ったまま、俺達三人の話し合いが続くのを待っているだけだ。表情はむしろ柔らかく、緊張感を俺達に与えないようにと頑張っている様子を感じた。そして、それが俺にとっては余計に緊張する原因になっていた。

「勇邁。お前、どういふつもりなんだよ」

勝が口を開く。よく、親父が言う。

勝の口調について、きつもんちよう、という言葉をよくよく、親父が使う。詰問調、という漢字は真由実に、その意味は椿に教えてもらったが、漢字はともかく意味についてはよく理解できなかった。とにかく、勝のこういう感じが、詰問調、ということなんだな、程度のことを俺は思いながら、

「……………」

黙っていた。

「これは望と豪の問題だろ。卓球で繋がりのある椿ならともかく、どうしてお前が出しゃばる必要があるんだ！」

勝の言葉はよくわかった。親父によく似て、言葉が難しい勝の言葉は、全然理解できないことも多いけれど、とりあえずここまででは理解できた。

「そもそも、卓球っていう繋がりがあるか？」

俺は単純に疑問に思っていることだけを伝えた。横目で見た親父は、呑気にコーンスープを飲んでいる。美味しくできた。とでも言わんばかりのわかりやすいにやけ顔が、意味不明だと思った。

「はあ？ あの二人は卓球が原因で喧嘩してんだろ。そもそも、望はもう気にしてい

「お、上手く揚がってら」

親父は一人、手が止まってしまっている子ども三人を放置して自分で揚げた唐揚げの出来に感動していた。その様子を見て、決めた。

「小六から一年一緒にいて、卓球してるはずの豪は知らねえんだよ。そうだろ？」

親父のその余裕面を、壊したいと思った。俺達の間流れている到底美味しい唐揚げなんて揚がりっこない、ちんたら、ヌルヌルして気持ちの悪い温度をした油のような空気を、親父にもぶちまけてやりたいと思った。親父の箸に持ち上げられた鶏肉は、香ばしい匂いと共に白い湯気をもうもうと上げ、親父の上達した料理の腕前を祝福しているみたいだった。

「……お前、さ」

髪を掻き、うんざりした顔で勝は呟いた。

「もう、さ、お前バカだわ。……わかってたけど。わかって、いたけどさ」

きつと勝がこうしてうんざりすることは俺の中では予想通りで、予想通り過ぎて、俺もうんざりした。けど、俺はやるべきことがあると思った。だから、続ける。

「アスペルガー。望のことを今まで誰も言ってこなかった。そうだろ？」

アスペルガー障害。発達障害。脳みその障害。望が生まれつき持って生まれて、今の今でも引きずっているモノ。

それが何かを、十三年幼馴染をしている俺も知らない。ただ、幼馴染をしていて気付く、これが望か、そういうのが望っていう奴なんだって思う瞬間が積み重なって、俺は望を知ってきた。

その十三年間がない豪は、少なくともそれを知っていれば。知ってさえいれば、どうにかなる部分が、ちっとはあるんじゃないか、とか。そういうことを、考えていたりもしたんだ。

「……………」

溜め息というか、長い息しか吐かない勝だったが、ここで口を開いたのは、椿だった。ついに望のことで、ここまでのことを話そうという俺の気持ちを知ったことで、黙ったままではいられなくなったのだろう。

「勝が反対しているのは、……………わかるよな」

「ああ。わかる」

簡単な確認の後、

「私も反対。けど、……………話をする事自体には反対しない」

少しだけぬるくなってしまったな、という顔をしながらみそ汁を飲む椿を見ながら、俺も眉間に皺が寄る。

「どういう意味だよ。俺にわかるように言ってくれよ」

「望について話をするのはあんたの仕事じゃないってこと。もっと話すのにふさわしい人がいるってこと」

親父が上手く揚がったと語った唐揚げを箸でどけて、その下の付け合わせのキャベツの千切り——椿の皿はその付け合わせの量が半端なかった。メインむしろそっちだろ。という程だった——を口に含む直前に、椿は俺に言った。

後は自分で考えろ、とでも言わんばかりの態度で椿は食事に集中し始めた。

そして俺は、誰がそのふさわしい人なのか分からないまま、口を開けないでいた。「ごちそうさまでした！」

ぱちん、と手を合わせる音をわざとらしく立てて親父は自分の食後の皿を洗い場へと運んでいく。結局、敵わなかった。という思いもあり、俺は顔をしかめたままで、「……いただきます」と言うだけだった。

「タイミンが最悪なんだよ。このバカが」

勝も自分の箸を持ち、手を合わせる。男二人仲良く頃合いを逃しちまったなあ、としみじみ思う。親父が無駄に感動していた湯気の立つ程の唐揚げは、ヌルヌルして気持ちの悪い温度をした油のような感触がした。

「猛さんと日向さんだよ」

唐突に勝が口を開く。は？ と俺は自分でも意味がわからないような声を上げた。「は？ じゃねえよバカ。もし豪に望のアスペを伝えるんなら、親である日向さん達からってのが当たり前の形だろうが」

ああ。と、ここでようやく俺も納得できた。

「話、するか？」

「……する」

「あっそ」

勝も、椿も、俺がする、と決断したら、後はあっそ、で引き下がる。そして、結局二人ともが俺の後ろをついてくる。

「お前みたいなのが一人で行動して暴走するとか想像するだけで恐ろしい」

とか何とか二人は口を揃えて言う。

「勇邁、キャベツ食えよ」

どっかりと自分のキャベツをほぼ全て乗せてくる勝を睨むと、

「俺、今日は肉が食いたい気分なんだわ」

そう言いながら勝は俺の視線や声等一切気にしないまま、椿の食べなかった唐揚げをつまみ、自分の皿に乗せた。

次の日の朝、親父を捕まえてあのヌルヌルした油の空気を止めなかったこととか、

俺にだけ釘を刺しておいて結局何も口を利かなかったことの原因を聞いた。すると、「さあ？　僕はお前一人だけで割り込んでいくのが嫌で釘を刺しただけだからね。こういう形ならば、日向や猛を巻き込んでくってんなら、僕は何も言わねえよ」

車椅子に乗った親父は俺の肩を叩きながら笑って答えた。

真由実だったり、椿や勝に対してなら、嫌がるだろうが頭を撫でたり叩はたいたりするもんなんだろうな、と俺は思った。

いつの間に親父にとって俺の肩は頭よりも丁度良い高さになっちまったんだろうか。

大人は、……いいや違う。親父は、卑怯だ。

敵わないな、という親父への敗北感ばかりを感じて俺は、溜め息を吐き、頭を掻いていた。

(続)

(第四回)

四・誰も諦めてなんかない

青緑色のアーチの下は、大きな川が流れている。百年前に氾濫して宮ノ訪は大きな被害を受けたらしい。だが、もう百年も前の話だ。ここで産まれ育った人達もその氾

濫を目の当たりにはしていないし、去年の春に引越して来た俺にとっては、本当に昔話に過ぎなかった。

その川を渡りきってから横断歩道の無い道路を渡り、土手沿いを歩いていけば寺隴尾じるみのゆめタウンだ。

その土手沿いの場所が結構広い。アスファルトもきちんと舗装されていて、そしてその側には芝生の道と遊具が置かれているのだ。

この公園の名前は千年公園と言って、でもだからと言って千年前から公園だったという訳なのか全くわからない。真琥さんも知らなかった。クラスの連中も知らなかったし、社会の先生も知らなかった。

詰まる所、『千年前からそうだったのかわからない公園』を略して千年公園。とふざけて言ったら、小学校の時にそれ流行るんだよね。と女子に言われて笑われた。俺としては何だか思わぬ形で恥をかけたような気分になってしまった。

そんなことを思い出しながら準備運動アップをしていると、でかい図体を捻りつつわざと右手を俺の肩辺りにぶつけてくる勇邁ゆうまの笑顔と目が合う。向こうは笑っているが、丁度つっぱりのようなものを毎度毎度食らうような形になっている俺としては結構シャレにならない。

「おい、痛えよ」

「何だよ何だよ。こんくらい痛くも痒くもねーだろ？」

「体格差と俺が病み上がりだってことを少しは考えろ」

「おめえもでかいんだから大丈夫！」

「どこが大丈夫なんだよ充分痛えってんだからもうちっと離れるや」

「んだよー。連れねー奴だなー」

勇邁が一步だけ右側にずれて芝生に座る。そのままストレッチを続けているその顔を見てみると、やっぱり笑っている。親子なんだろう。俺にちょっかいを出すその時も、俺をここに誘う時の顔も、そして風邪が治ってすぐの俺を日向さんに会わせた時の顔も、その姿には父親の真琥さんの姿がどこかダブって見えるようだ。

追う背中があるっていうことは、こういうことなんだろうか。俺はというと、いつの間にか女を作って俺と母さんを追い出したような背中を持ち主を追いかけたくなから、正直に言うといいな、と、羨ましいかも、と思う。

「けどあの背中を追っかけるの難しいし、色々と苦労も多いわね」

と日向さんは笑って言った。日向さんはまず俺の話聞く所から始めた。その時の俺も思ったし、今も、多分時間が経っていくにつれ、あの時の俺の気持ちや行動についてのは訳のわからないものになっていくだろうし、恥ずかしいものになっていくんだろう。ああ、これが黒歴史って奴か。嫌な言葉を教えてくれたもんだよなあ。真琥

さん。

あの日何があったのか。そんなに難しいことじゃない。九州大会団体戦準々決勝。勝った方が全国へ駒を進めるという場面で、一番シングルスだった俺が負けたのが事の始まりだった。

四単一複。つまり四つのシングルスと一つのダブルスで先に三勝した方が勝ちになる団体戦の初戦である一番シングルスはチームの空気を左右する一戦になる。そして戦力的な問題もあった。

向こうの学校はほぼ全員が個人戦でも九州大会まで進んでいて、しかもダブルスが圧倒的に強い。今までの試合で一セットたりとも落としていない状態でここまで勝ち進んできたペアだった。

片やこちらは俺と望、そして卓球部唯一の上級生、八口先輩の三人しか九州大会まで個人戦で残っている選手はいなかった。

そんな状況で俺が負けた。しかも、セットカウント0―3という零封で。そしておまけに、その隣の二番シングルスでは相手の主将を3―0で逆に完封した望を目の当たりにする羽目にもなった。

最初は何が起こったのかとか、どうしてこんな風になったのかとか、色んなことが頭の中でごっちゃになって、訳がわからない。そう思った。そしてそう思いながら、

どうしよう、と思う気持ちはどうしようもなく、俺は試合が終わってからしばらくチームの応援にも参加出来なかった。

俺が負ければチームも負ける。それを誰も口にはしなかったが、それは俺が一番わかっていることで、とにかく怖かった。

俺達は八口さんも含めて来年があるといえればある立場ではある。しかし、今年の大회는当然今しかなくて、そしてそれを俺が終わらせてしまうのだけは嫌だった。それもあんな舐められたような戦いで。零封という結果も御免だった。いや、個人ことは置いておくとしても、こんなに順調に勝ち進む事ができたんだ。来年もまたこんな風に進むとは限らないんだ。こんなに、『おしい』状況で、みすみす全国出場を逃して良い訳が無い。無いのに負けた。どんな顔して応援すりゃ良いんだ。所謂戦犯として顔を上げて挨拶をするんだろうか。望は相手チームのナンバーワン相手に結果を出したというのに。ごちゃごちゃとした、そして試合中には感じなかった恐怖に、俺は二階席の片隅でタオルを被って震えていた。

俺にとって本当に予想外だったのは、その後四番シングルスで平河が勝利を収めてくれたことで、それが八口さんの逆転勝利にも結びつき、俺達は全国への切符を手に入れたし、そのまま九州大会優勝までできた。

俺が負けた事はまだ良い。それは単純に俺が弱いってだけだから。俺が一番嫌だっ

た事、それは。

「お前が負けた事なんて俺にとってはどうでも良い」

と冷静に、なのだろうがその時の俺としては冷酷に吐き捨てられた望の言葉だった。本当に、今となってはどうしてそれだけであいつの胸ぐらを掴み、殴るまで頭に血を上らせてしまったのかわからない。けど、俺はそれくらい自分の結果にこだわっていたというか、賭けていた。

俺が勝つ事でチームは勝ちに一步近づいて、望やダブルスの能塚のつか兄弟、平河、そして八口さんがまたそれぞれに勝っていく。皆で一つの勝ちに繋げていく。それは今まで俺があんまり体験したことがないことで。だから、中学に入って九州大会という舞台にまで行き着いて、それが続けられることが大きな喜びだった。なのに。なのに、俺の結果は、どうでもいいものだ、望は言ったのだ。何か、今まで積み重ねて来た俺の中の喜びが、一瞬のうちに崩れ落ちてしまうような感覚だった。

気付いたら、望を殴っていた。そのまま覆い被さるようにして、殴り続けようとしていた。そして腹に一発蹴りを入れられて、逆に殴られた。覚えているのはそれまで、その後どんな殴り合いを展開していったのか、全然覚えていない。とにかく、反省文とホテルの人への謝罪。巻き込まれた形になった望も当然だが一緒にそれをやる事になり、本当に苛立っていた。露骨な舌打ちをして、また先生を怒らせていた。そ

の側では、多分勇邁という喧嘩止めの名人がいない中で、どうにかしようとして先生を呼んだんだろう。能塚兄弟が、双子らしく揃ってぼろぼろ涙を流していた。

そんな話だ。日向さんと一緒にあの時を振り返りながら、俺は自分の行動を振り返って話をした。そして、日向さんは俺に謝った。圧倒的に悪いのは俺なのに、日向さんは望のことを俺に謝った。

そして望の一面を聞いた。

人の仕草を見ても気持ちが出来ないこと。興味を持っていることにしか熱意を向けられず、それ以外のものを切り捨ててしまうこと。そしてそれを否定されることをとにかく嫌うこと。

人を傷つけても、傷つけたことにすら気付かないこと。

望は人の気持ちに興味がない。そのことに少しは気付いていた。小六の春休みに、望に寺隴尾で初めて会った時に俺は久しぶり。と声をかけた時、あいつはその意味を理解していないようだったから、俺は面食らって一週間前の大会の決勝戦について熱っぽく語る羽目になって、確か、その時にも日向さんは俺に謝った。

なるほど。あの時俺は望を物覚えの悪い奴、と思ったけど、違った。

絶望的なまでに、他人に興味がなかったのだ。そっか。一年付き合っって何となくだけど、感じていたけれど。そういうことだったんだと、納得して、そして困惑だって、

した。急に椿の言葉が蘇る。あいつは変わらない。どうせ。

あの諦めには理由があった。そういうことなのか。そうだったのか。俺は日向さんに問いかけて、

「劇的に、という訳にはいかないわね」

とだけ、日向さんは笑った。何故笑ったのかは俺にはわからなくて、また困惑した。

その帰り際に、日向さんから一つ願い事をされた。この事を知っても、何も変わらず望と付き合って欲しい。それだけだった。

「別にどうということはないっすよ。あいつが障害持ってよーがそうでなかるうが、俺は友達ですから」

口でそう言ってその瞬間、自分で自分に嘘をついているような気分になった。本当にならなくらいられるだろうか。不安だった。俺は、本当に変わらずに望と向き合えるだろうか。その日は不安だった。

そしてその直後に勇邁に走り込みに誘われて今日に至る。

そこには椿もいて、望もいた。全員勇邁が誘ったのだろうか。余計な事をしてくれる、と最初に思い責めたが、どうやらそれは俺の考え過ぎだったようだ。

「そもそも俺が誘ったら逆に椿は来ねーし望は俺がどうのここのじゃねーし」

一緒に走り出しペースを合わせて会話する。

望と椿は少し遅れて——というかそもそも一緒にする約束もしていないのだから遅れてくるというのも不自然だけど——来て、アップを始めていた。

「椿ってドライっていかさ、怖いっていかさ」

「厳しい」

勇邁のたった一言が余りに的確な気がして、

「あ、そうそれ」

と思わず言って吹き出した。

「俺がこの前負けた時なんてさ、あいつ一々俺の上の席に座ってからグッサグッサ刺さるようなこと言うだけ言って消えやがったからね。俺本当に泣きそうだった」

そう言うと、ああわかる。わかるわそれ。という勇邁の相槌が帰ってくる。

「望のこともさ」

一呼吸。別段構えたりした訳じゃない。呼吸の関係で、ここで切れてしまっただけで、また言い直す。

「望のこともさ、あいつは変わらないって。まるで一生このままだって言わんばかりの言い切り方だったね」

ふうん。勇邁の返事は短くて、まるで思うより興味が無いんだろうかと俺は思った。それとも、今のタイミングでこの話題はまずかったのだろうか。頭の中ではそーい

う勇邁の態度を見ての思考がぐるぐると回っている。……きっと望ができないのは、こういうことなんじゃないか、と考えながら。

「それ、嘘だぜ」

勇邁から追加の返事が返って来たのは芝生を一周半くらいした所で、一瞬俺は勇邁が何を言っているのかがわからなかった。

「あ、まあこれは俺が思っているだけなんだけどな」

俺の顔が一瞬きよとんとなってしまったからだろうか。勇邁は頭を掻きながら言う。「あいつさ、泣かねーじゃん？」

俺は黙って頷く。小六から一年の付き合いしかないけれど、俺は椿が泣いたところを一度も見えた事がない。弟でも、それを見る事はなかったんだろう。

「けどさ、あいつ望のことが絡んだ時だけ泣くんだけだぜ」

その言葉を聞いて俺は思わずはあ？ と声を上げて勇邁を見てしまった。そして、前見る前、あぶねーだろうが。と注意される。

「確かー。そうだそうだ。去年だからお前いたんだけど、あれだったよな。お前家の用事で来れなかった大会あったろ？」

勇邁の言葉に去年の記憶を呼び起こす。そういえばあったな、とすぐに思い出す事ができた。そもそもダブルス大会ということでペアを作らない限り出場もできないも

ので、シングルスプレイヤーである俺にとっては何れ程大事だとも思えなかったし、望も椿と組む事でミックスダブルス部門に出場出来るのだからそれで良いやっとなつた覚えがある。

「あれでさ。お前も知ってるだろうけど俺や勝も応援に行ったんだよ。何もなかったし。んで、一応ベスト4までは行ったんだけどさ、全国まで行くくらいの高校生ペアに当たっちゃまって負けちまったんだよ。何か難しいこと全然わかんねーけど、アレだろ？ 二十対二十とかって珍しいんだよな？」

その問いかけに単純に俺は頷いた。当時小六だった二人は全国区高校生ペア相手にデュースどころかそんな点数になるまでデッドヒートしてたのかよ。そんな驚きも含まれていた訳だが。

「最後だけ何か覚えててさ。望の打った球がネット掠ってオーバーしちまって。もしたら相手の二人が抱き合って喜んでやんの。ガキ相手に大人気ねえなって思って軽くボコしてやりたくなった。相撲じゃありえねえ」

アスファルトに出て行って本格的に走り始めて、今度は勇邁が熱っぽく言ったが、お前が言うのと冗談でも何でもなくシャレになっていないだろうと、心の中だけで留めた。

「悪い、少し脱線した。最後ミスったの望だった訳だけどさ。何故か椿がトイレから

出てこなくなっちゃまってさ。何でだよって、なるじゃん。あいつ目を赤くして言うんだよ。私をもっと頑張れば、アレくらの相手、望ならどうとでもできた。望の力なら、アレくらの相手は大した事ないってさ。泣きはらした赤い目して言ってんの。当の本人はあー終わった。くらの態度だっけんのにさ。勝と一緒にいんか、何ていうの？ がっかり、じゃねーけどさ。複雑な気分にもなるわな」

「んでさ。豪」

俺に話しかけて来た。何だよ、と返すと、

「あれ以来さ、望の事興味なくなった？」

質問自体は、実にシンプルだった。俺は答えがすぐにまとまって、そして、言おうとして、

「うわ、おっそ」

という椿と、そのすぐ側を並走していた望に追い抜かれてしまい、言えなかった。「うっせーな。俺は忙しいんだよ。お前等と違ってな」

勇邁は声を上げてペースを上げ二人に追いつく。俺もそれを見てすぐ負けじと三人

に並ぶ。その後はデッドヒートになった。トレーニングをしに来ているのか競争をしているのか、すぐにどうでも良くなった。最初に短距離ならぶっちぎりでトップを走る勇邁が落ち、女子の椿が落ちて、そして俺と望の二人だけになった。

「体調は大丈夫そうだな」

「ったりめー」

それだけで、後は会話どころか、互いに声すら出さなかった。今までもそうだったし、今日もそうだっていう、ただそれだけだった。

雲が速く流れていく。俺達二人も、それに負けない様に、速く、速く走っていたように思う。そう思うのは、俺だけかもしれない。でも、雲にも、隣を走る望にも、負けたくなかった。

ヘトヘトになり戻ると、すっかり息も戻った椿が、勇邁にぶっちぶちと文句をぶつけていた。やれトレーニングがトレーニングになってないと、やれそんなだからあんたと一緒にやるのは嫌なんだと。勇邁も慣れたもので、あーはいはいごめんなさーい。と受け流していた。椿が俺達に気付いた素振りを見せて、説教も終わりかなと俺は思ったが、

「そもそもあんた昨日からテンション上がり過ぎて気持ち悪かったからね。なーにがもちろん椿も来るよな？ よ。訳分かんないし。あーやっぱり来なければ良かった！」

まだ止まんねーのかよと思った。ちらりと勇邁を見ると苦笑していたし、望は既に興味なさそうにしてクールダウンのウォーキングに入っていた。

「んでも望がここに行くってんだから付いて来たんだろ？」

勇邁の言葉に椿は即座に蹴りで返した。

「しょーがねーじゃん。俺いっつも一人でやってんだぜ？ 自主練。寂しいじゃんか

」

立ち上がりながらやれやれと言わんばかりの大振りジェスチャーで言葉を発する勇邁は、やっぱり真琉さんに似ている気がする。椿もそれを感じてか、少し嫌な顔を強めたように見える。

「勝手に一人でやってろ」

とだけ言って椿は望に小走りで追いついて続きのメニューへと入っていった。

「難しい年頃ですなー」

と悟ったようなことを言う勇邁に、お前と同年だけだな。とだけ言ってみた。すると、

「まーな。けど親父もよく椿と会話した後には言うから真似してみた」

あっけらかんとした口調で勇邁は言って笑った。

「そもそも本当に諦めて、変わらないって思ってたんなら椿は望と一緒にトレーニング

しようなんて思わねえよな。親父や日向さんに猛さん、あと真由実もそうだ。ま、お前もそうだよな。二人で帰って来たし、本当に振り切られる事なく帰って来れんだもんな。マジにビックリした。お前等速過ぎ」

「卓球に体力は不可欠だろ。っていうか、お前が短距離型過ぎるだけ」と返した。

「だって一瞬でカタが付くんだぜ？ 単純で良い。アレだろ？ シンプルイズゴッド」
「神かって。シンプルイズゴッドな。ゴッド。俺等はそんな単純な場所ではやってらんねーの。あと、ケツも出せねーし出したくねーし」

勇邁にツッコミの意味が通じるかどうかはわからないが、とりあえず言いたい事は言っておく。真琉さんなら、そこで迷わず「出せよケツ。ケツ出せや」となるところだろうが、勇邁はハイハイ、と言うだけだった。

勇邁と別れて望と椿に合流すると、すぐに椿に話しかけられた。

「けど正直、男子って単純で羨ましいわ」

「どういう意味だよ」

「そのまんまの意味。二人で並走するなんて、女子じゃ絶対あり得ない。……まあそもそも殴り合いの喧嘩自体あり得ないけど」

明らかに見下げるといふか、バカにする目で俺と望を睨む椿を尻目に、

「俺は悪くない。先に仕掛けて来たのは豪の方だ」

正しいことを言っているとは思いうが幾分かの原因を作ったのはお前だろうがよ、と多分言っても伝わらないんだろうな。

だけど、俺はそう言った。また喧嘩になったりするかも知れないが、それでも俺は伝えていた。

「……………」

望は怒る様子を見せる事はなく、少しだけ考えてから、

「真由実にもそう言われた。ま、適当に言いたいことを言わせておいたら収まったけどな……というか、あいつは何でいきさつを知っているのか。その方が気になるんだが」

と言った。その質問には、

「くそじじいが真由実に根負けしたんじゃない？ もしくは取引でもしたか、何かしらの手を講じて聞き出したか。頭はいい子だし、それ以外には考えにくいし」

椿の方が答えた。まあ確かにガーゴンのリュックサック背負って学校に行くとか色々アレなどにはあるけど、頭の良さなら間違いない真由実のことだ。それくらいのことを自分で考えて動いていてもおかしくはないか。

「そうそう。真由実も言った。男の子っていうのは何であんなに早く仲直りできる

のかなーって」

椿が思い出したかの様に言った。

「小四なんて子どもじゃん。子どもなら別に女子でも仲直りくらいできるだろーよ」
俺は軽い気持ちでそう答えたのだが、椿は露骨に眉をしかめた。

「小四女子の社会を舐めてるとしか思えない」

椿の短くて強い語気に、俺は少し驚きと怖さを感じた。

「マジかよ小四って九歳とか十歳だろ。そんなドロドロしてんのかよ」

俺の問いかけに椿は、今更そんなことに気付いたのかよとでも言いたげな目線を向けていた。

「興味ないな」

望は相も変わらずそれだけで、自分のメニューを淡々とこなしていた。

「別にそれで良いんじゃない」

椿もそれだけを言って、後は無言だった。

二人はこんな感じだから合うんだろーな、とも思った。だからといってお似合いだな、なんてことは言えない、そんな微妙な感じも俺は感じていた。

「なあ勇邁」

翌日、昼休みに学校の廊下で呼び止めると、側にいた勝も付いて来た。

「昨日はありがとな。誘ってくれて」

「まあ単純に俺が一人でやりたくなかったただだからな。気にすんな」

「そっか。なあとところで、さ」

「あん？」

「椿ってさ、望の事好きだったりするのかね」

「なんじゃそりゃ」

勝が呆れた口調で言う。勇邁は、

「俺はそういう惚れた腫れたは好かん。だから知らん」

「そーだな。昔流行ったもんな。あれ俺等もメンドイ目にあっただし」

「そうか？ 俺別にそこまで思っていないけど」

「お前はめんどくなったらそいつ等保健室送りにしてただろ？ つかそれが余計に

俺をめんどい立場に追いやった。二人して俺をどんだけ追いつめてくれんだよってあ

んときゃ本気でお前等呪ってたからな」

勝の呪い節を軽く聞き流すようにして、俺は続ける。

「まあ昔は大変だったんだな。あ、一応俺はこれ茶化す気持ちとかで聞いてないから」

流石に本人に聞いたりする訳にもいかないが疑問にも思った。だから聞いてみる事

にしたのだ。

「それはわかるけど。わかるけど考えたくねーわ」

勝は単純に昔のことを思い出してしまうのか、しかめた顔が元に戻せないような態度を続けていた。

「俺は、そうだな……」

勇邁は頭を掻き、言葉を選んでいる様になっている。すると、

「お前等三人で何やってんだ」

椿と望が微妙な距離を取って歩いて来た。二人で一緒に歩いていたのか、それとも単純な偶然で一緒にいるように見えているのか、それはよくわからなかった。

「あー。まああれだよ。誰も諦めてなんかないっていう話をしていたんだよ」

勇邁の返事に、椿はいつも通りの対応だった。

「お前はもう少しだけでも良いから伝わる様に話せよバカ」

そういう毒舌に対しても、あーハイハイさーせーん、と昨日以上に適当に返す勇邁も中々負けていないと思う。

「ほら、あと一週間もしねー内に俺等全国じゃん。勝たねーとな。バッチリと！」

拳を突き出す勇邁だったが、

「……脳筋って言葉か、もしくはスポ根バカ。精神論者って言葉でもいいけど、その

意味を真由実にでも教わると良いんじゃない」と言うなり、椿はさっさと教室へと入っていく。

「……………」

壁にもたれかかるようにして立っていた望も、腕時計を見て椿の後を追っていった。「そもそも俺に至っては部活入ってないからな。やってやっても良いけど、何かそれ虚しいだろ？　じゃあな」

言葉だけは優しいが、勝も結局そのまま自分の教室へと戻っていった。

「どっちにせよ虚しいだろ。これ……」

勇邁は右手の拳を左手に打ち付けて落ち込んでいた。

「まあ一応俺がいるから。つーか、まあ、ありがとうな。誤魔化してくれて」

礼を伝えると同時にチャイムが鳴る。ダルイ五限目はそのダルさを加速させる国語だ。嫌になる。全く。教室に入ろうとして、そこで思い出す。

「あー。そうだ。確かに大事だよな」

「あ？　何が？」

「諦めないってことだよ。誰も諦めてないんだよな」

俺の問いかけに、勇邁は笑って答えた。受け継がれている明るい笑顔。その言い方。

「応！　誰も諦めちゃいねえよ」

拳を俺の方から出してみる。勇邁の反応は早かった。

「頑張れよ！」

勇邁の声は強かった。色々な意味で、強いと思った。

望について日向さんは、劇的には、と言った。椿は、それで良い、と言った。勇邁は誰も諦めてないと言った。多分、俺が思っている事も間違っちゃいないはずだ。ぶつける拳の持ち主が望になる未来は、多分間違っではない。一週間後の全国大会か、それとももっと先か。俺は単純だけど、頑張ろうと思った。

「……あのバカ、もうちっと手加減できねえかな」

望が怪訝そうな顔をする横で、俺は椅子を引いた。

(了)

I believe your brave heart

書かれなかった寓話

日居月諸

こんにちは。突然のメッセージ、失礼します。twitter 文芸部についてお話したいことがございます。スカイプのユーザーIDをお知らせしますので、お時間頂けますか？

Twitter でフォローを交わして間もない、面識の薄い人物から送られてきたダイレクトメッセージの末尾には、英数字が並んでいた。陸山が返事をしたのは数分後のことで、休日で自宅にいた彼はすぐに会合の場を持つとした。

そちらがよろしければ今すぐにも話せます。ただいま連絡先追加のリクエストを送りましたので、認証をお願いします。

一連の手続きを終えた陸山は浮き浮きとした心境で返事を待った。普段関わりの薄い人間が声をかけてくる理由といえば、ほとんど彼が twitter 文芸部の窓口めいた役割を務めているからにほかならない。これまで何人もの新入部員を招いてきたが、そのたびに彼は特権意識を感じてきた。見知らぬ者と会話をする億劫さも確かにあった

が、それよりも他の部員に先んじて新しき仲間の人となりを知り、後になって訳知り顔で皆に紹介できる喜悅に比べれば些細なものだった。

スカイプのコンタクトが認証されるまでの間、陸山はメッセージの送り主のツイートを調べることにした。紗江、と名付けられたプロフィールには文学に多少興味があると書いてあり、Twitter のアカウントは作ったばかりのようで、まだフォローもフォロワーも少ない。

手持ちのカードが少ないまま会話に臨むという、わずかばかりの不安を抱きはじめていた頃、スカイプの通知音が鳴った。いつのまにか認証が済んでいたようだ。

——こんにちは。申し訳ありませんがマイクを持っていないので、チャットで失礼します。

——大丈夫ですよ。はじめまして、陸山と言います。

——はじめて、というわけでもないのでしょうか……だって小説の中でお会いしているのですから。

小説の中？ と首をかしげつつも、冗談の上手い人だ、と笑い飛ばすつもりだった。しかし、相手はそれより早く、

——新田、という方がそちらに在籍していますよね？

確かに新田という部員はいる。一年ほど前に入部し、何作か小説を書いている男だ。

——私は彼の小説のモデルなのです。「横を向いたまま」、覚えていらっしやいますか？ 娼婦だった祖母が亡くなった、あの小説の語り手である紗江は、私なんです。映しだされた文章を前にして陸山は困惑した。確かに覚えている。娼婦だった大伯母を持つ女を語り手とした小説は覚えている。それについて困ることは何も無い。困惑は、これから先にやってくるだろう厄介事を予見したことに困っていた。

——別にプライバシーについて訴えたい案件があるわけではないのです。それならば彼に直接言えば済む話ですから。むしろ私は、小説に出てくる人々が言っているように、大伯母を誇りに思っています。それについて包み隠すことは何一つありませんし、何かデタラメを書いたというわけでもない。

すぐさま打ちだされた文章からは偽りのなさがうかがえた。それを見て少し余裕を取り戻した陸山は、文章を相手に行っていることの安易さを活かして、**twitter** 文芸部のホームページを開いた。二月に発行したウェブ雑誌に、話題にのぼった小説が載っているのだ。

語り手である女性、紗江は、大伯母の訃報が入ってきたのをきっかけに、幼少時の記憶をめぐっていく。戦後娼婦として、親を失った一家の生計を立てていた大伯母の後ろ指を差す者はいないし、本人もまた、臆面もなく昔語りをしてやまなかった。そんな小説の露骨さと比例するように、目の前には正面を切ってモデルであると告白す

る女性が存在している。

——それはわかりました。でも、なぜ僕に？

——あの小説を皆さんはどう読んだかを知りたくて……というより、あの小説を書いている新田のことをどう思っているかを知りたくて、と言った方が正しいですね。

——新田さんのこと？

——まわりくどくても仕方がありませんね。実はあの小説には新田が出てこないのですよ。本当は私や、他の孫二人と同様に、大伯母の話を知っていたはずなのに。あの土地で、かつて色街だった土地で生まれ育ったはずなのに。先程デタラメはない、と言ったけれど、一つだけデタラメは残っているんです。新田という存在が消えているデタラメが。

そこで一度区切られた。おそらく、陸山が読みやすいように配慮してくれたのだろう。ややあって、ですから、と文章は書きはじめられた。

——そんな風に隠し事をしてる人間を、皆さんがどう思っているか、彼の預かり知らぬところで調べたいと思ったのです。いわば、しっぺ返しですね、私の預かり知らぬところで小説を書いて、しかも自らを消すなんて真似をしたことへの……。

あからさまに自らの意図を開陳する態度に、陸山は眉をひそめた。とはいえ文章の上のやり取りだからこちらの態度など伝わりはしない、と気付いた時、少しだけ冷静さが戻ってきた。

——あまり好ましくない話だな。大体、新田さんに今日の出来事を話すことだっ
て出来る。そうなる、預かり知らぬ話ではなくなりますよね。

——別に話してくれても構いません。むしろ話してくれた方が好都合です。彼が
隠し立てしていることが、自分の預かり知らぬところで露見してしまった、という事
実が伝えられれば動揺するでしょうから。

つまり、こうして会合を持ってしまった時点で失敗なのだろうか、と陸山は自分

の迂闊さを指差された気分になった。

——そこまで言うなら、やっぱりあなたは小説のモデルにされたことを怒っているのでは？

——先程も申しあげましたが、彼があのお小説の中から消えていることこそ怒っています。実際に大伯母は亡くなって、去年の冬に葬式が執り行われました。彼は来なかった。それはまあ、血族でもないから仕方がない。その報せをきっかけに小説を書くのもまた、元々が耳目を惹く話ですから当然でしょう。しかし、あたかも私達一族とは関係のない他人であるかのごとく書いた作者の態度については、納得が行かなかった。葬式に参列しなかったのを口実にするようには、自分を消すような横着を見逃してはいられなかった。

——そこまで書き出されると、陸山はすぐさま反論した。

——小説は実際の出来事を書くにしても、ある程度フィクション性を持たせないと話が進められないものです。だから、新田さんは自分を消すというフィクションを

導入すること、あなたの一族の真実を端的に、客観的に書くようにしたんじゃないのかな。

文章を打ち出して相手に送った時、これがあくまで専門分野の話に過ぎず、一般論としては通らないのではないかとおそれが萌しはじめた。もっとも、間もなくしてやってきた返答には、専門分野の土俵に乗ってくれるという意思が示されていた。

——それは重々承知しております。作家は往々にして自分の経験を語りますし、そこに多少の脚色を交えるというのも知っています。自己防衛を目的にするにせよ、作品の統一を図るにせよ。

一度区切られた文章を見て、多少文学に興味がある、という Twitter のプロフィールを思い出したが、それにしても、これでは多少興味があるどころの話ではないように思われた。

——しかし、彼らは自分を消すような真似はしなかったのではないのでしょうか？ 漱石は『道草』で自らの分身である健三を登場させているし、志賀直哉は天津順吉を

自らの代理として多くの小説を書いている、そのほかにも……人物として登場させないようなものがあるにせよ、作者の思惑が如実に出ている作品は多数存在しているのに、なぜ新田は、あんな風に自分を消す必要があったのか。

さらに文章は区切られる。それこそ新田に真実を訊ねればいい、と口を挟もうと思えば挟めたのだろうが、薄々好奇心が湧き出しているのを感じ、書きあぐねているフリをして次に来るメッセージを待つことにした。

——新田は嘘をついている。嘘をつくというのは、それこそ作家が脚色を交えることで作品を面白い物にするように、自分の思惑通りに事を運ぶための行為です。嘘をつくことで部員の皆さんの目に新田はどう映っているのか、新田はどういう風に演出されているのか、それを知りたくて私は陸山さんに声をかけたのです。

一通り読み終えても、陸山は返答しなかった。目の前に並べられている材料を整理する時間が必要だった。それを察してくれたのか、メッセージはひとまず中断されている。

作者は嘘をつき、その嘘は登場人物のモデルになった人物によって暴かれている。

いまだモデルの魂胆を測りかねるところはあるにせよ、ともすれば復讐とでもいえるような話に加担するのは陸山としても気が引けた。出来れば内々で話をつけておいてほしい、と無関係を装いたかった。しかし、事が小説に関わってくるとなると一考の余地が生まれてくる。陸山とてアマチュアながら筆を執っているのだから、小説については一家言ある。そしてこれまたアマチュアが書いたものとはいえ、一つの作品がいかなる過程を伴って出来上がったのか、という事実関係を明らかにする探索作業には興味があった。それが普段から付き合いのある人間にまつわる探索であれば尚更だ。

——実際、陸山さんはあの作品をどう思いましたか？

——正直なところ細かな部分はよく覚えていないですよ。半年ほど前に一度読んだだけだし、それにかなり特徴的な文体を使っているし……でも、あなたの話を聞いて、感想を変える必要があるのかな、とは思っている。たとえば、特徴的な文体はあなたの言うように作者の痕跡を隠すためのものだったのではないか、とかね。

いまだ専門分野に留まっている感想だったが、どっちつかずの態度を取るにはうって

つけの言葉だとも思った。都合のいいことに、相手からの反応もこちらが設けたテリトリーからはみ出さないものだった。

——嘘偽りなく語るために晦渋になろうともあえて多くの言葉を用いて表現する、という作家もいますけど、この場合は逆なのでですね。自分が作品に入り込まないようにするために、あえて聞き慣れない言葉を用いる。

事実、発行後に行われた合評会の記録を見ても、聞き慣れない言葉につまずいている部員は多い。もっとも晦渋さが拒絶されているわけではないし、参加者のいづれもが書き手であるせいも、意匠として許されている節はある。とはいえ、そうした許容はそれこそ専門分野に留まるものであり、文学は芸術にカテゴリーズされる営みなのだから世間的な言葉遣いから外れても仕方ない、という特権視も透けて見える。あたかも新田の施した装飾は作家としてのものだけに留まると見做しているかのよう。つまり、誰もが作者・新田の意匠しか捉えられておらず、人間・新田の意匠は捉えられていない……だが、その程度の掘り下げでも問題はないはずだ。作品を見せ合うという気の置けない付き合いをしようとも、他人同士であることに違いはないのだから。しかし、陸山はここで一步、そのタテマエを越えてみたくなった。

——小説の作者であるなら、誰もが目指している地点があると思うんです。作者の痕跡を一通り消して、単純に登場人物だけで成り立っている小説を書くという地点が。人物が作者の操り人形にならず、文章も透明で、装飾なく、あたかも現実をそのまま体験しているかのような印象を読者に与える小説。

今度は陸山が一つ区切りを作った。向こうは言葉を待っていてくれる。

——もちろんそれは理想ですから、たどりついた人はきつといない。多かれ少なかれ、作者は作品に自らの痕跡を残してしまふ。開き直って痕跡を濃密に残そうとする人もいますが、僕はあくまで理想を追求する方に賭けてみたいと思います。でも……自分が濃密に関わった出来事を書きながら、同時に自らの痕跡を消そうとする人は、浅学ながら聞いたことがない。それこそかえって、自らの痕跡を消そうとする努力が浮かび上がってくるだろうに。そうした矛盾は、興味を覚えます。

そしてそうした興味は、あなたの抱いている復讐じみたものとは違う、という思いが脳裏によぎった。面と向かっていたら表情に出ていたかもしれないと思うと、大

分剣呑なやり取りをしているのだな、と陸山は実感した。

——相当、文学について知見を積んでいらっしやるんですね。初めにお会いするのが陸山さんで良かった。

——いえ、僕は自分の興味に基づいて動いているだけです……そもそも、あなたはこういうきっかけで twitter 文芸部に？

——偶然、興味のある作家を検索していたら行きつきまして。

——それはもしかして、古井由吉？

——新田の「杏子」に関する評論を見て、どんな小説を書く人なのだろうと思ったら、驚いたことに……。

——もしかしてあなたは、新田さんを通じて古井由吉を知った？

——ええ、ですから彼とはそれなりに長い付き合いになります。もっとも、彼が仙台に残って、私が山形に帰ってからは、ほとんど疎遠になっていますが。学部こそ違うものの私達は同じ大学に通っていました。昔からの仲というものは難しいもので、そこでも特別深い関わりはなかったのですが、顔を合わせればお互いの近況を教え合うくらいの話はしていましたね。その中でも一番話が弾むのは文学の話だった。いえ、彼は文学のことしか話してくれなかった、と言うべきでしょうか。

おおよそ陸山の知っている新田と変わったところはない。そもそも新田とは文学でしかつながっていないし、彼について知っていることと言えば、年下であること、山形で生まれて現在は仙台に住んでいること、作家を目指していること、それくらいだった。

新田が文芸部に入部するために声をかけてきた時、彼の Twitter のプロフィールには「古井由吉、夏目漱石、小島信夫などの日本文学を祈るように読みたい」と掲げられてあった。陸山はそこにアマチュア特有の気負いを嗅ぎつけ、祈るようにして読むとはどういうことかと問いただしてみたが、要領を得ない答えが返ってきた覚えがある。部員のそれぞれもまた、果たしてこの新入りは大丈夫なのだろうか、と言葉にし

ないまでも思い合ってきたところに、アマチュアが書くにしては大部の「杏子」評論が送られてきた。そうして部員の皆がいつしか新田を、とりあえず文学に関しては一
家言持った人間だとほったらかしにしていたのがこれまでの経緯だった。

もっとも、それが文芸部で付き合う上で当たり前の態度だった。文学に関するサークルなのだから文学に少しでも興味があるならばそれで良い、多少人間性に疑わしいところがあるうと文学について話せばそれで構わない、なぜならば我々はネットでも交流しないのだから。現実の交流とは違って、部員の人となりをよく表すのが小説や詩という文章だけで成り立った作品と言うことも、そうしたスタンスを取る一助になっていただろう。作品によって人柄を知ればそれでいいのだ。

——じゃあ新田さんが大学時代に書いたものを読んだこともあるんですか？

——いえ、文学に興味があると言うだけで、書いているかどうかはまるで。

陸山の知る限りでは新田は大学時代から小説を書いていたという。その頃から「横を向いたまま」で採ったような方法を使っていたとわかれば、あくまで作風として片

づけられるかもしれない。しかし、そこが不明瞭であるからには、さらなる過去にまで遡る必要が出てくる。陸山は瞼のあたりに重苦しいものがのしかかってくるのを感じた。

——となると本格的に新田さんの過去を、あなたから聞かなくてはいけないのかもしれないな……でも、少し時間をください。あまりに突然の事だから、少し整理する時間が欲しいんです。もしくは、本人とコンタクトしたら話が早いかもしれないから、新田さんにどう話をすればいいか考える時間が欲しい。あなたとしては早く話を付けたいでしょうけど。

——小説を読むという行為はある意味、現実で付き合うよりも人間性をよく踏まえることが出来ると思ひまして伺ったのですが、やはり不躰でした。

——それは間違っていないですよ。ある作家の特徴を知る時、僕らは読者に対して訊くことがありますからね。でも、私生活にまで踏み込んでくるとなると……。

——私はいつでもスカイプなり Twitter なりで対応出来ます。そちらの御都合に合わ

せていただいてかまいません。

あたかも新田と紗江の間を仲介するような運びになっているが、未だに内々で話を付けておいてほしい、という思いは拭えなかった。なぜこの見知らぬ女は、新田に直接真相を問いたださないのである。第一、古い付き合いのある人間にわからないことが、どうして一年やそこらの付き合いをしただけの人間にわかるというのだろうか？

もしかしたら、この女は新田を陥れようとするためにこんな話をしてきたのかもしれない、と思いつつ、形だけでもこれからもやり取りを続ける約束を取り付けておいて、陸山は会話を打ち切ることにした。

——わかりました。それではまた。

向こうがオフラインにしてから一息入れると、いつもなら新しい仲間が加わった知らせを他の部員に伝えていたことを思いだした。関わりのなかった人間と交流を持つのは気を張ることで、これまでならその緊張を皆と分かち合うという発散の機会があったが、今回は秘密を守らなければならない。ネット上の交友は、現実の事情を持ち

こまないがゆえに成り立っている面もあるから、新田の面目のためにも沈黙は必須だ。しかし、一人で背負い込むには事情が込み入っていた。

先程のチャットを振り返りつつ、これからどうするべきかと案じていると、スカイプのポップが開いた。まだ話し足りないことがあるのか、と紗江のことを思い浮かべてしまったが、オンラインになったのは部員の大瀬良だった。

改めて自分の問題にふけりこもうと目を反らしかけたが、まもなく、大瀬良になら事情を説明してもいいのではないかとという考えが浮かんだ。別にイの一番に現れたからというわけではない。年長で古参の部員に当たるこの男なら、首尾よく振る舞う方法を教えてくれるだろうと思ったのだ。

——ちょっと話したいことがあるんですが、いいですか？

少し間があって、いいですよ、と返答が来たので、陸山は通話のボタンをクリックした。装着したインターカムの向こうから空気の擦れる音が聞こえてきて、あいさつを送るとようやく訛りの効いた声が出てくる。

「どうされました？」

「一から話すと面倒なんです……実は新田さんの知りあいが見れたんですよ。さっきまでチャットで話していました。本人の話すところによると、「横を向いたまま」の語り手のモデルらしい」

意味を捉え兼ねたのか、戸惑ったような声が聞こえてきた。ここでしっかりと説明しないと、そもそも先程までの紗江との会話は幻となってしまわないかと思われた。どうして、得体の知れない人間の信憑性を他人が保証しなければならないのだろう。

「……で、その人は何でまた陸山さんの許に？」

「それがよくわからない。ただ告発されただけなんです。彼女と新田さんは幼馴染だそう。小説のモデルにされたとはいえ嘘を書かれたわけではないんだけど、ならばなぜ作者である新田さんは自分の分身を登場させなかったのか、それが気になって

いるとだけ言ってきた」

ううん、という唸り声が聞こえてくる。疑われている感じはしない。むしろ、自分の想像を下回る事実を扱いかねている様子だった。

「まあ、あの小説は確かにあけっぴろげに書いている小説ですからね。モデルがいたとしたら怒ってもおかしくない……いや、怒ってはいないんだったか。それにしても、あんな風に爛れた土地が実際にあるとはねえ。大伯母の武勇伝めいたところに、ちよっとついていけないところもあったな。官憲の男を籠絡してただとか、娼婦だと知らずに抱いた男と結婚したただとか……」

「そうした事実があけすけに書かれている割には、文章は入り組んでいるんです。現在の出来事を語っていると思えば、何かのきっかけに過去が混入される。おまけに文法もねじれている。一族を支えていた大伯母という大きな存在の死をきっかけに、あらゆるものがタガを外したようになだれ込んでくる、意図したところがあるとすれば、そんなところかな」

「それを紹介していく語り手の印象は薄いな。語り手のエピソードはほとんどなかっ

たのでしよう、きっと。他人のエピソードばかりでね」

「だけど、今僕達の前にはその語り手がいる」

「……自分のことは語りつくされていなくても言いに来たのかな」

そういって大瀬良は一笑に付そうとしたが、実際のところ新田の秘密と共に、彼女の秘密もまた語られたようなものだった。現状ではほのめかし程度にとどまっているが、これから先、更に多くの事が紗江の口から語られるだろう。陸山は自分が言い放った、なだれ込む、という言葉を思い返しながら果たしてそれを受け止めきれぬか不安になった。

新田は血族ではない、と紗江は言っていた。血族でもない人間でも知りうるほどだから、喧伝とは言わぬまでも語り継ぐこと自体に抵抗はないのだろう。彼女達一族は自らの歴史に誇りを抱いている。度外れた歴史をフィクションだと思いついていた余所に真実を伝えるくらいに。一度真実を知ってしまったからにはお前も同じ穴のムジナなのだと思わず引きずりこんでくるくらいに。

「しかし、新田さんには話さん方がいいと思うけれどね。俺らが判断する事案でもないけれど、他人に相談するってことは並大抵じゃない経緯があるんでしょう。それを第三者が解決するというのもおかしいなもので、結局してあげられるのは、本人同士話し合う方向に持って行ってやるくらいなものだと思ふな」

大瀬良が提示した方針には反対のしようがないし、陸山自身もそれが一番穏便だろうと思っていた。しかし、紗江が携えてきた謎、なぜ新田は小説から己を消したのか、という問題を明らかにしたい心も拭いがたく存在していた。

「大瀬良さんは新田さんの昔の小説を読んだことがありますか？ 入部する以前の、学生時代に書いたものを。ひよっとしたら、彼女を説得するための糸口になるかもしれないんです」

「入部して間もない頃に読ましてもらったな。ちょっと待ってください」マウスをクリックする音が聞こえるので、おそらくファイルを探しているのだろう。しかし、

「あれ、おかしいな……」

「見当たりませんか」

「うん。他の部員の習作も仰山見とるもんでね。定期的に消さんといかんですよ。もしかしたら何かの拍子に削除したかもしれない。でも、筋は大体覚えてますよ。原稿用紙四十枚くらいで、ある程度ストーリーはありましたから。」

主人公の通う高校に、のべつまくなしに男を誘惑する女子がいるんです。噂だけが存在を知っていた主人公は、ある時その娘に声を掛けられた。まあ、お誘いですね。けれど彼はそれを断ってしまう。童貞をそんな女を相手に捨てるのはまっぴら御免というわけで。とはいえ向こうも口は達者ですから、とりあえず連絡先を交換する運び

になってしまった。いや、彼女が勝手にアドレスを書いたメモをポケットに入れたんだっただけ……体を交えるのはともかく、主人公は好奇心旺盛ですから、友達くらいにならないともいいと思う。そんな話でした」

「それはまたあけすけな話ですね」

「でも文章は普通ですよ。童貞がアバズレにどうやって逆襲するか、というテーマが書かれていたと思うな」

「それは新田さんの実体験ですか？」

「まさか」大瀬良は苦笑した。「いやあ、事態がこうなったからにはわからんし、性的なものを書く事で自らの胸の内を暴露する、というのは若い内にはよくあるしね。もしかしたら今回やってきた人と、この女の子は同一人物かもしれない。でも、あれが実話だとしたら、なんで「横を向いたまま」では自分を消すようなことをしたのか、ますます説明がつかなくなるでしょう」

「まあ、確かに」

「それに、昔の小説では二人は仲良くなってしまうし、そこがまずいところなんです。最初の方は未知の人物と出会う緊張感を描こうとしていたんだけど、それがお互いに連絡先を交換し合ってから、急に失速してしまう。普通の、ありふれた仲の良い男女になってしまうんです。確か、娼婦的な女のアイデンティティを奪う、つまり、

体を交えるのを拒絶することで童貞が優位になる、と書いてあったけれど、その割に二人の会話は馴れ馴れしい」

いかに筋道を立てて説明してくれても、やはり実際の原稿を見ていないだけに陸山には大瀬良の示すところがイメージ出来なかった。加えて、どのみち新田の過去を明らかにする手がかりにはなりそうもなかったからと聞き流す体勢になっていたのも、イメージの欠如に拍車をかけていた。

持て余した想像力は、大瀬良の言う娼婦的な女を紗江と重ね合わせる方へと費やされる。小説という、作者の視点によって現実を抽出する表現形態では人物を完全に捉えきえることはできない。信憑性の大小があるとはいえ、噂話と変わるところはないのだ。

そして、噂でしか知れなかった人間が急に実体を伴って目の前に現れてくる。彼女は自分が噂の的となっていてのを知っている。噂を流した者が誰かも知っているし、彼が嘘をついているのも知っている。彼女は真実を知れと誘い掛けてくる。嘘をあたかも真実であるかのように書き連ねた作者への復讐を共に成し遂げようではないかと、手を差し出してくる。

「その小説を読んだ人は大瀬良さんだけですか？」

「いや、雨野さんもおったよ」そう言って、大瀬良は年少の部員の名前を挙げた。「一

年ほど前のものだから、彼も持っているかどうかはわからないけれどね。原稿を受け取るなら作者自身に訊けばいいんだろうけど……まあ、当面は俺らだけが知っている話にしたほうがいいでしょうね。それにしても、腑に落ちないところはあるな。向こうがぼんやりとした言葉を投げかけるだけなのに、こっちもそれを秘密にしないといかんというのは」

「おそらく、追々明らかになっていくんだと思います」

「向こうが事情を明らかにしない限りは、こちらでも受け取りかねるといふ態度を示した方がいいかもしれませんね」 交渉術としては上策なのかもしれないが、陸山としては気が進まなかった。

「大瀬良さんのように私生活をほじくりたがる人なら耐えられるのかもしれないけれど、僕は正直なところ面倒で仕方がないな」

「人聞きの悪いことを」大瀬良は苦笑する。「でも、そうしない限り話は進まんでしよう。こちらから情報を出してほしいというのなら、そちらもそれなりの対価を出せというわけです」

ならば交渉役を代わって欲しい、と言いつつもさうになったが、どうやっても愚痴にしかなりそうになかったので止めた。もしかしたら紗江は新たな第三者が話題に加わってくるのを歓迎するかもしれないし、進んで自らの情報を提供してくれるかもしれないな

い。しかし、そうなると新田の立場が危うくなる方向に舵が取られる可能性だってあるのだ。

「とりあえず彼女に当たるのは僕の役目ということにしておきます。彼女が大瀬良さんや他の部員にコンタクトを求めたら話は別ですが、おそらく彼女の興味はtwitter 文芸部自体には向かっていないと思うので、このことはあくまでも内密に」

「なんだか陰謀を企てるみたいだね、こんな風に話してると」

気楽に言ってくれる、とは思ったが、実際に紗江と会談していないからには他人事としてしか話せないのは当然な話で、むしろその気楽さはあるがたいものなのだろうかと思えてきた。今まで一対一で向かい合うことにはばかり意識が向いていたが、それがさしたる問題でないかのように笑い飛ばしてくれたおかげで緊張感が和らいできたのがわかる。

「また何かあったら声を掛けてください。頼りになれるかどうかは別として、その女性に興味は湧いてきているんでね」

「その際にはお願いします。正直なところ、一人では抱えきれそうにもなかったから、助かりました」

いえいえ、という声を残して通話は打ち切られた。

通話が終わった後ようやく一息ついた陸山は、先程までの大瀬良との会話がずいぶんと楽なものだったと振り返っていた。やはり部員としゃべるのは緊張感がいらぬ。陸山として社会人であるから人間関係に苦勞することは多いのだが、この文芸部と接している間はそうした厄介事から解放されている。もちろん、人間関係のトラブルは幾度となく起こったが、部員達はおおむね、文学に基づいた関係である以上お互いの性格を云々するという面倒な地点に踏み入ることはせず、穏やかな交流を続けているように思える。お互いの顔が見えないというのは、お互いのパーソナルな部分に踏み込みようがないことを意味する。答への出ない問いを解こうとしても意味がないのだから、一線を引いた上で交流を続けたい。仮にパーソナルな部分が出てきたところで、演じられたものである可能性も否定できないのだから、受け入れたい。そういう風にしてこの文芸部は成り立ってきた。

紗江との会話が緊張感に満ちたものであるのも、そうしたことが一因になっていた

だろう。紗江はネットの弱点であり利点でもある隠されたパーソナリティを無効化しようとしている。何なら話を思い切り拡張して、文学を語る上で御法度とされつつある人格攻撃を行おうとしている、と言っても良い。そこを守りきることで無駄な摩擦を食い止め、精神を健康的に保つための防衛線をこの女は踏み越えようとしている。その点で陸山や大瀬良は、この防衛線をどうにかして守りきろうとしているといいってもいいだろう……しかし、そんな義理が元々あるのだろうか？ 新田のプライバシーを守る義理が。インターネットの秘匿性を守る義理が。文学の匿名性を守る義理が。

正答の出ない問いかけになりかけたのを察して、陸山はデスクから立ち上がった。まあ、なるようになるだろう、とパソコンの電源を落としかけた時、再びスカイプの通知音が鳴った。大瀬良からだった。

——もしかして、だけど……今回の件は新田さんのイタズラではないかな。そんなことをするような人には見えないかもしれないけれど、こちらの思い込みを利用してこそイタズラは成り立つものなので、ついそう思ってしまうます。

これまで一度も頭に浮かんでこなかった推測だったが、十分ありうる話だとは思っ

た。それならば文学に精通しているのも納得が行くし、新田の来歴に詳しいのも当然だ。なにより、自分が書いた小説なのだから設定などいくらでも組み立てられる。問題は、目的がなんなのか、という点だが……いずれにせよ、目的がわからないのが同じならば、一時の遊び心に付き合う方がよっぽど楽ではある。それもまた精神を健康的にする方法かと思いつながら、ともかく様子を見てみましょう、とだけ返信して、シヤットダウンのアイコンをクリックした。

それから陸山は機会があるごとに Twitter およびスカイプを利用してしたが、紗江は姿を見せなかった。ツイートもしないし、オンラインにもならない。あれほどの打ち明け話をした後にしては大人しいようにも思えた。陸山から声を掛けると約束したのだからコンタクトがないのは当然として、ネット上に何の足跡も残さないのは意外だった。同時に、何事もないのだからそれでもいいだろうとなおざりにしておきたい心も片隅にあった。

同時に、新田も顔を出さなくなった。しかし、あくまで紗江が姿を見せないことについてに思い当たっただけで、特に心配はしていなかった。元々ツイートは少なく他人と関わりを持っていく姿も見かけないし、スカイプでも大瀬良のような率先してコミュニケーションを取ってくる部員とばかり話している印象がある。大瀬良や他の部

員にも音信があるかどうか訊ねてみたが、いずれも特別な根拠がないまま私生活が忙しいのだろうと返してくるばかりだ。皆が皆、無関心に触れかかりそうな態度でもって新田の不在を受け止めていた。しかし、その無関心にもある種の信頼は混じっている。向こうもまた立派な大人なのだから、ネット上の知人を頼りにするような真似はしないだろうという願望を込めた信頼が——陸山もまた、新田が現れてくれない方が紗江も声を掛けてくる機会を逸したままにいるだろうと、むしろ安心しながら構えていた。

新田の動向を訊ねる過程で、年少の部員である雨野に声を掛けた。新田の昔の小説を持っているかどうかを確かめるためだったが、こちらもファイルを消してしまったようだった。覚えている限りのあらずじを教えてもらったものの、大瀬良の話すところと変わりはない。一つだけ、性的な言葉を露骨に用いているので少なからず違和感を覚えた、とは言っていたが、予測出来る範囲だった。「横を向いたまま」で見せたように、娼婦によって系譜をつないでいった一族のことも平然と描けるのだから、娼婦的な少女だって書けるだろうし、露骨な淫語だって書けるのだろう。そこまであからさまに筆を執れるにもかかわらず、なぜ自分を書く事を避けたのか。紗江が、そして陸山が探し求めているのはそこだった。

——でも、いったい何故今頃になって？ 大体、僕じゃなくても本人が持っているだ

ろうし……。

小説の所在を訊ねた時、雨野はこう訊いてきたがそれにはもっともらしい理由をつけて答えておいた。

——初めは新田さんに催促したんだけど、昔の小説だから見せたくない、って言うんだよ。

何事もないまま日々が過ぎていく中、陸山はこんなツイートを残した。

小島信夫の『抱擁家族』を読み始めている……「三輪俊介はいつものように思った。家政婦のみちよが来るようになってからこの家は汚れている、と」……違和感の残る書き出しだ。日本語として成立するかどうかのギリギリのラインで文章を連ねている。家政婦のみちよが来るようになってからこの家は汚れ始めた、の方が収まりは良い。そもそも、三人称を使っていながらこれは読者への説明のための文章にはなっておらず、人物の視界を重視した文章になっている。

普通なら、読者にもわかりやすいように具体的な家の汚れを見つけたシーンを描いてから、みちよの責任だと説明するはずだ。けれど、『抱擁家族』は最初から主人公の日常を描いている。読者は何のクッションもなく登場人物の私生活を目撃する羽目

になる……！

となると、汚れ始めた、ではなく汚れている、としているのは一定の妥当性を帯び始める。正しい日本語が読者と作中世界をつなぐものなら、正しさからズレている日本語は作中世界独自の言語となるはずだ。小島信夫は、一般項にくくられることのない登場人物の固有性を描こうとしている。

陸山にとって、こうしたツイトはメモ代わりだった。小説を読んで頭の中にくすぶっている断片を形にすることで、意識を明確にする。明確にすることが出来れば残ったページを読む上で指針が作れるし、読み終わってからでも記憶として定着させられるのだ。

公開する以上は最低限整った文章を書こうと心がけているが、特別、他人に見せるためのものではないと思っっている。誰かに宛てるわけではなく、自分の揺らいでいる意識を矯正するために書いている。

とはいえ、公開しているからには稀にリプライがやってくる。同じ本を読んで似たように不確かな思いを抱えた者が、共に意識の矯正作業をするように文章を送ってくる。他人に見せるためのものではないと思っっているながら、頭の片隅ではそうした突然の来

訪をアテにしている部分もあった。一人で楽しむ読書の醍醐味もあるが、大勢で楽しむ読書の醍醐味も捨てがたいと思っていた。

紗江がリプライを送ってきたのは、陸山がツイートしてから一時間ほど経った時だった。

陸山さんも『抱擁家族』を読んでいるんですね。私も最近ひもとき始めたので、この偶然に驚いています。

〈次号に続く〉特

合同教会の人びと

小野寺那仁

一年ぶりに見る瑠奈の顔はやつれていて眼光ばかりが鋭く、化粧気が洗い流されたように土気色だと静間（しずま）は感じた。耳に刺したピアスは虫ピンのように小さかったが少し気になる。以前にはしていなかったはずだ。茶色に染めた髪と合わせて彼女の日常が荒んでいるのではなからうかと思った。

英会話のレッスンは終わりに近かった。今日のクラスはビギナークラスなので知っている者はいない。一年前に静間を嵌め込んだ葬儀屋の陽気な男もいなかった。テキストの一文に静間は目を落とす。

今日、私の夫が失業した。これからは家事をすることになるだろう。

確かに瑠奈はその箇所を説明していたのだが倍速のスイッチを押されたように早口で何を言っているのだから聴き取れない。前回もそうであったが、たとえテキストであっても自分の心に躓きを覚えるような箇所になると聴き取りの困難なほどにスピードがアップする。頭を使っているよりも口が勝手にしゃべっているようでもある。やがてレッスンは終わったらしくおもむろに瑠奈はテキストを閉じると静間を含めた五人の生徒たちも一斉にテキストを閉じる。

「わからないことはありませんか？」誰も応えない。俯いたままだ。

「ないようですね」わからないことはあるのだがそれを英語に翻訳して質問するにはビギナーには至難だった。

わめきたてるように瑠奈は英単語を速射した。今度は三倍速か五倍速のスピードになった。ネイティブスピーカーでもこうは速くはしゃべらないだろう。さまざまに変化する口唇が嫌でも眼に飛び込んでくる。拡大された濡れた濃い紅に彩られたくちびるはそれ自体が生き物のように思えた。初めはスピードに面食らったが徐々に静間は思い出してきた。一年以上前にも同じようにレッスンの終わりには個人的な日記のような日々の断想をあるいは予定を瑠奈は語っていたのだった。内容はレッスンとは関係のない話だった。

離婚した瑠奈の夫である木島からどんな様子なのか教えてほしいとは告げられていたこともあって初めは必死に聞き取ろうと試みたが途中からはあきらめた。この一年カナダに留学していた瑠奈の会話能力は一層磨きがかかっているようだった。ところどころ聴き取れた単語はチャーチ、クリスマス、パーティーなどなど。そこから推測するとどうやらクリスマスパーティーを企画しているのだろうと。そして一年前と同じように生徒たちを誘っているのだろうと静間は考えた。だが「サイケデリック」という言葉がミュージシャンとは繋がらなかった。瑠奈はかつてバンドのリーダーだったのでおかしくないといえればおかしくもないのだが。

ところどころ理解できるといふのはまったく理解できずに関わらない方が無難な場合もある。たとえ義務感から、あるいは興味からであっても。セーラー服のまま来た女子学生もスーツの若手社員も作業服の技術者も静間と似たりよったりの対応であったが、静間ほどあけっぴろげて理解できないことを露わにしない。彼らは隠すのが巧みだった。わからないのにわかっているふりをして、そして都合の悪そうなことはやりすごす。

「ミセス？ いや、ミス・ルナ！ パードン」

「何？」

たまりかねた生徒のひとりが言った。静間よりも遙か年上の女子学生の祖父といってもいいくらいの年頃の男だった。

「申し訳ないですが、もう少しゆっくりとお話ししていただけるとありがたいのですが」

もちろん、これは日本語だ。教室内では日本語は禁止のはずであったが年配者は時々ルールを無視する。瑠奈はむっとした表情に変わった。

「まあ、おわかりにならないかったらわからなくても構わないですよ。今の部分は。授業に関係のない個人的な事ですから」瑠奈は年配者から視線をはずす。

「でもみなさんほんとうにわからなかったのでしょうか？」

誰も答えない。静間は、そこにいるすべての生徒たちからじっとりと身体のあちこちから汗が滲んでくるような気がした。

「あなたはわかってるわよね。答えて！ ゆっくりと」瑠奈はスーツ姿の女性を指した。

「ええっと、なんとか教会でクリスマスパーティーを行うので来てくれると嬉しいな。私はミュージシャンで演奏します。私はキーボードで唄います」

「何、その日本語？ 変でしょ。英語で言いなさいよ」

それから彼女は英語で言った、たどたどしい。けれども静間には彼女を批判する資格などはない。彼は首を傾げているばかりだった。彼女の頬は恥ずかしさから真っ赤になっていた。彼女はモデルのように端整な顔立ちであった。肌もきめ細かく一見すると頭脳明晰にもみえるがここでは英語をそつなく使えるかどうかだけがすべてであった。このクラスは初心者なのだから聴き取れなくても仕方なかるうにと静間は思っていたが、瑠奈は彼女を闇雲に叱責して病的な興奮状態に陥っているようにも見えた。彼女の困惑を見るにつけ瑠奈は発音が悪いと何度も何度も言い直しを迫るのだった。しまいには彼女は目に涙を浮かべていた。幼子のように。それでも瑠奈は追い打ちをかけた。瑠奈の奇妙に歪んだ顔が性的に興奮しているような表情にも見えた。

「ゼロ歳から五歳までここで習ってたはずよ。日本語の習得の障碍になっただけな

の？」

気まずい沈黙が流れた。私たちの誰もが瑠奈を止めることはできなかった。

ああキッズ英会話からの生徒か、静間は理解した。

間が悪かったが、時間は過ぎていたので生徒たちはごそごそと帰り支度を始める。残っているのは彼女だけだった。静間も席を離れようすると瑠奈は両手で制止してきた。それではばらくは残ることにした。木島のこともあったから話してもよかった。ただ何をどう話したらいいものかは整理しなければならなかった。

「United Church は合同教会って翻訳すればいい」その言葉は彼女に向けられてはいるものの生徒全体に対しても聞かせたい言葉であることは瑠奈の表情から窺える。

だがすっかり時間を過ぎてしまっているので生徒たちは聞いていなかった。「グッドナイト」とか「シーユー」とかたどたどしく口にして次々席を立った。瑠奈のクリスマスの提案にまるで関心がないかのように。

瑠奈は帰り支度をしている静間の傍らに歩み寄ってきた。おもむろにオシリの辺りを三本の指を使って肛門を開くようにスーツの上から押し付けてくる。

「来てくれるよね！」とっさのことで静間は声を出しかねた。今度は静間の身体に覆いかぶさるように迫ってきた。息苦しさからうなずきそうになるのを必死にこらえる。ふたりがもつれあっているのを見てチャンスとばかりにさきほどの瑠奈に責められ

て泣き腫らしていた若い女性がすり抜けて行くのが見えた。耳にかぶりつきそうなど顔を寄せてくる。吐息が生暖かく、さきほどまでのレッスンのやや生真面目な雰囲気を一気に吹き飛ばしてしまった。ただ静間は独身ではあったがそうした一連の仕草が義務と演技を伴った一種の人妻らしいサーブスであることはわかっていたので真に受けることはなかった。もとより別れたとはいえ瑠奈は木島の妻と言う認識は揺らぐことはない。

「あなたのパーティーはロクなことが起きないからなあ」他の生徒がいなくなったこともあって静間は思い切って言う。一年前に同じようにレッスンのあと名目は不明だったがパーティーに誘われた。フェラーリの葬儀屋がいた。瑠奈のバンドのメンバーたちが現われた。それから瑠奈の自宅で飲むことになり旦那の木島も紹介された。静間はぐでんぐでんに酔っぱらっていたがワイングラスが卓子で碎け散る音で目覚めた。眼の前には鬼子と化した瑠奈が喚き散らしていた。あとから思えば自宅に職場の知人や趣味の仲間が押し掛けてくるぐらいで妻を追い出すというのは度を過ぎていただろう。静間が酔いつぶれているうちに瑠奈と仲間たちはいなくなっていた。その時初対面だった木島と静間は仕事の話ばかりしていた。木島はエンジニアだったので信頼を得る、あるいは彼らとは違って巻き込まれただけだという弁解をするにはそうせざるをえなかった。

「あいつが変な奴だというのはわかっていたんだけどね」

開け放たれた高層マンションの窓から強い寒風が入り込む。焚火の匂いがする。木島が、味噌汁を作りながら言った。

「俺達が夕食をとにもするのは一ヶ月に何度あるだろうか」

「はじめはそんなでもなかったんだけどね」

「はつきりそうだとは確信できないけど瑠奈は不感症で俺はインポテンツだ」

木島は独り言のようにぼつぼつと打ち明けてくる。ガタイのいい男だった。

「もっともあいつの不感症は俺に対して、俺のインポテンツはあいつに対して」

「木島も連れてくるんだよ」耳もとで呟くには大音量だった。静間の耳たぶはしつとりと唾液で濡れていた。静間は教室のコナーに追いつめられた。瑠奈は全身の力で覆い被さる。身動きが取れない。熱が伝わってくる。狂おしいほどに熱がたぎっていた。

「ちょっと、何するんですか？」

誰かに見られたらヤバイだろうと静間は思う。

「もう離婚したんじゃないの？」

「誰と？」

「木島とに決まってる」

「ああ、なんかあんたと仲良くなったそうね。スキーやそれからブーケットにも行ったそうじゃない」

「連絡は取り合っていたんだ」

「いろいろ書類の手続きとかあるからね。それだけよ」

瑠奈はカナダへ行きそこで教会のシスターになったとこの教室の支配人である春子から聞いていた。それが僅か半年あまりでまた戻ってきたのだ。

「木島君も強がって見たり落ち込んだりと感情の起伏が激しくてね」

「あいつのことだから若い女と遊んでいるのじゃないかと思っていた」

あえて言わなかったが木島はいつでも会社の新入社員をとつかえひつかえスキーに連れてきていた。そこから何かが芽生えるという性質のものではなかった。

「なんで教会から戻って来たんですか？」

「合同教会？ のこと？」

「いえカナダの？」

「ああ、あれも合同教会なのよ」

「意味がわかりませんね」

「カナダの合同教会と提携したのよ。2000年からだけど。シスターになるうかと

思っていた時期もあったけどね。私には向いてないわ」

考えてみれば木島とのつきあいは、たかだか一年だが、瑠奈とは通算すると五年ほどは経っているのかもしれない。忘年会やポットラックのパーティなどで話し込んだことはあるがそこでは木島の話は微塵も出なかった。

「この英会話教室の秘密特訓所というか教師研修センターがカナダにあるの。そこで指導を受けてきたの。去年まではアルバイトだったけどTOEICのスコアが満点になるとネイティブなみのお給料が貰えるから」

そう言われると実もふたもなく現実的な話だった。木島との生活をやめマンションを追われ実家に戻るわけにもいかなかったら、英語ができるのだったら当然の結果ともいえる。

「教師養成センターが廃止になってほどなくして教会でテロが起きたのよ。本当のことなんて誰にもわからないけど、私も日本じゃ考えられないような出来事と思っただ、起きてしまったから仕方ない」

「テロ？」

「過激派らしき一部が関係してきたのよね」

「それで？」

「さすがにあたしもへこんだ。一日中ボンヤリと窓から見える山肌をみて暮らしてい

た。そこは初めて行ったんじゃないの。新婚旅行で木島と過ごしたウイスラーの高原なの。そのときも木島はひとりでチャンピオンコースを滑走していたから私はひとりきりだったけどね。やってられないわよ。日本の良さがわかったってことかしら」

海外に渡航した日本人が生活慣習の違いや社会情勢の変化から戻ってくることは不思議でもなんでもない。この学校でもロンドン、タイ、チベット、グアム、アメリカ本土、ニュージージーランドで政変や自然災害に遭遇した者がいた。比較的安全なのはオーストラリアやカナダであった。

ようやく瑠奈は息を整えて、静間から離れた。

「襲撃された人はね。ギタリストだったの。特に政治や宗教に絡んでいるようには思えなかったけど何か情報を伝えたりしてたんでしょね。後頭部をハンマーで殴られた後に刃物で削り取られて雪の中で倒れていたの。グリズリーにやられたように。大の字にあおむけに寝転んでいた。他の子たちは泣いてばかりで祈るだけだった。あたしは警察が来た後にいろいろ片づけたり捜査を手伝ったりしたの。死体を抱きかかえると十字架のペンダントが雪の上に落ちて自分でもおかしいくらいに絶叫した。涙が止まらなかつた。それは人種や国籍に無関係にどこでも共通した感情だったの。ただね、ただ……」瑠奈は言い淀んだ。静間は英単語が渦巻く痺れた頭で考えを巡らせたが、しばらくたってもいっこうに考えがまとまらず何と返事していいものだろうかと

途方に暮れる。正直なところ彼女のエゴイスティックな人生を無理やりに垣間見せられることには辟易する気持ちもないではなかったが知らん顔してそのまま通り過ぎるには深入りしすぎていた。

もともとは会社の新製品をタイでプレゼンテーションする可能性が出てきたためにこの英会話教室に通い始めた。ただ英語はいっこうに進歩せずそれが元凶でもないだろうがタイに行く辞令は蜃気楼のように立ち消えになりつつあった。

「なんていうかありきたりだけど味噌スープの味が恋しくなったということかしら」「いいですよ。行きましよう。クリスマスパーティー！」それでも言わなければここから解放してくれそうにない！ 半ば自棄な感覚だった。くたびれたスーツは静間の内面の表現でもあった。

「ありがとう。じゃあ木島も連れてきてね。日曜日にするからイブの夜じゃないけどね」

「伝えますが、本人が納得するかはわかりません」

「場所はM岬の合同教会でね。スーパーマーケットの敷地内だからすぐわかる」

「今までも何度か言われていたところですよね」

「さっきのクラスの人たちは来ないみたいだけど上級クラスはみんな来るよ」

「じゃあ僕たちのクラスは下級なんですか？」

「まあ初心者でしょう。長くやってる人ばかりだけど」

瑠奈先生は教科書を小脇に抱えて天井を眺めるようにして控室に歩いて行った。

「シーユーアゲイン」静間はつぶやいた。

受付でマネジャーの春子が待ち構えていた。彼女はすぐに嫌味を言うのであまり好かれていない。嫌味な事を言うのが知性と勘違いしている損なタイプの女性だった。春子はこの教室が始まって以来のメンパーで瑠奈よりも何歳か年上だ。独身である。「遅かったじゃない。何をグズグズしているのよ」妙になれなれしい。

「まだ今月分の月謝の引き落としがされてないみたいなんだけど。いま現金で払いますか？」

「あれ？　そうでしたっけ。ちょっと持ち合わせが」静間は財布の中身を改めて確認したが必要な金額の半分にも満たない。

「ないなら次回に持ってきてください」春子は事務的に言った。

「わかりました。すみません。ところで春子さんもクリスマスパーティーに行くのですか？」

「え、瑠奈ちゃんのこと？」

「そうですね」

「行かないわよ！　日曜日でも子どもや学生の教室はあるから仕事なのよ。仕事じゃ

なくとも行きませんがね。去年は行ったけどあんなどこ行くもんじゃないわよ。断わりなさいよ！」

「ずいぶんひどいじゃないですか！」静間が返事をする間もなく横槍を入れたのは蒼白な顔色ながら愛想の良さそうな青年だった。

「United and uniting churches の悪口に僕は耐えられないです。静間さん、パーティーに行く前にネットで検索したり合同教会のブログをチェックしたりしてください。感動すること間違いありませんから！僕は神学生です。N大学の院に通っています。瑠奈先生は素晴らしい方ですね。クリスマスパーティーにはぜひ来てくださいね！」青年は静間の手をがっちり握る。

「ちよっと！ 布教活動は困ります。ここは上場企業なんですよ。どうせカルトですよ。どうみてもカルトの教会じゃないの！ あんたあそこに行ったらびっくりするよ！」

「一応、日本基督教団に属してますが反発もしてますね。名前も決められない状態なんです。だから一般名詞である合同教会を固有名で名乗ってます。それに対する批判や中傷もありますけどね。そういうことはインターネットでチェックしていただければよくわかります。あ、僕は高橋侑といいます」

「あんたバイトでしょ。チラシを配ってるだけじゃないの！ もう、でしゃばりなん

だから。あんたなんて私の権限ですぐにクビにできるのよ。瑠奈ちゃんもね。とにかく布教活動はやめてほしいです。厳禁です！ いいですか。守れないなら今すぐ辞めてください！」

瑠奈が連れてきたアルバイトの青年のようだった。

静間は居心地が悪くなって結晶のはりついたガラスの扉を開けた。みぞれ交じりの冷たい猛烈な風が吹き込んでくる。樹木を彩るイリュミネーションが点灯して、クリスマスに近いことを物語っていたが、恋人や子どもでもない限りは無縁のイベントだった。どこかから第九番交響曲の合唱部分も聞こえてくるような気がしたが、それは静間の幻聴だったかもしれない。かつてはその場所で聖夜の数日前から短大の合唱部が練習していたのだ。今は廃墟のようながらんどうのビルであったが。静間は振り返り英会話教室を眺める。

「シーユー、アゲイン」

（連載一回分）

記録

記 録

記録

記録

■二〇一三年『Litweet』秋号、発刊になりました。(10/7)

■十月定例会 (済み)

十月十三日二十時(日)～

今回発刊された2013年秋号の創作合評会の日程、及びホストを決めたいと思います、投稿された方は是非参加してください。

ホスト：る

参加者：6 日居 イコ うさぎ 小野寺

■二〇一三年『Litweet』秋号掲載作品、合評会

○第一回 (済み)

十月二十七日(日)二十時～

ホスト：6

記録

対象作品

詩「マーシャル諸島を目指そうよ」：るゑと深街ゆか

詩「手」：加津也

小説「天使のはしだ」：Rain坊（63枚）

小説「終日杳かに相同じ」：日居月諸（56枚）

参加者：小野寺、日居、Rain坊

○第二回（済み）

十一月三日（日）二十時～

ホスト：緑川

対象作品

句集「夜食」：イコ

詩「詩3篇」：る

詩「たべられたい」：深街ゆか

小説「アンファンテリブル」：崎本智（6）（74枚）

参加者：小野寺、6（遅刻？）

○第三回 (済み)

十一月十日(日)二十時～

ホスト：小野寺

小説「言葉遊び」・Rain坊(6枚)

小説「意思のゆくえ」：小野寺 那仁(17枚)

小説「黒い秋の訪れに」：安部 孝作(34枚)

小説「ファイナルファンタジー」：うさぎ(52枚)

参加者：小野寺、6、青転、イコ、緑川、うさぎ、Rain坊、深街

■11月定例会(済み)

十一月二十三日(土)二十時～

ホスト：深街

参加者：小野寺、日居、Rain坊、緑川

いきます。是非参加してください。

■小島信夫『抱擁家族』読書会(済み)

十二月二十三日(祝)二十一時

ホスト：日居

参加者：小野寺、イコ

■批評の勉強会(済み)

十二月二十五日(水)二十一頃から

テキスト：スーザン・ソントグ『隠喩としての病』(抜粋)

評論を読んだ上で得た感想を述べ合った後、そこで得た視点をを用いた応用問題に答え
ていただきます。

会場：スカイブ(通話)

ホスト：日居

参加者：小野寺、ふかまち、イコ、Rain坊、うさぎ、緑川

■ 入部・退部

13/11/04 青転さんが入部しました。

13/12/16 Pさんが入部しました。

13/12/23 青転さんが退部しました。

編集後記

編集後記

あけましておめでとうございます。

編集長 深街ゆか

寒さが例年並みだとか以下だとかそんなニュースが流れるそばでジングルベルが鳴り、メ切が近づくなかで、文芸部で勉強会をひらいたり編集会議をしたりしていたらクリスマスは終わり年は明け、そんなこんなで原稿が集まりました。

「It's a small world」という特集テーマにはさまざまな色をもった作品が、「自由」の方では主題にしばらくられずにかかれた作品が集まった、多様な号になりました。連載では引き続き、展開に期待させられます。それでは『Li-tweet 2013 冬号』発刊です！

Li-tweet 冬号

発行日

平成二十六年一月七日

編集長

深街ゆか

編集委員

崎本智（6）、安部孝作、小野寺

発行者

twitter 文芸部

ツイッターオフィシャルアカウント

<https://twitter.com/twibun>

ホームページ

<http://twibun.jimdo.com/>

執筆者（五十音順）

イコ

[@ikorineeee](https://twitter.com/ikorineeee)

小野寺那仁

[@onoderak](https://twitter.com/onoderak)

崎本智（6）

[@SakiAllende](https://twitter.com/SakiAllende)

常磐誠

[@evagredra](https://twitter.com/evagredra)

日居月諸

[@das_unheimliche](https://twitter.com/das_unheimliche)

る

[@ru_mentanpin](https://twitter.com/ru_mentanpin)

あんな

[@annecat1310](https://twitter.com/annecat1310)

ふかまちゆか

まどめPDF作成

小野寺

本誌はホームページに掲載している「Li-tweet 四月号」をプリント用、電子書籍端末用に編集し直した物です。記事の無断掲載を禁じます。

© twitter bungeibu 2013

Twitter 文芸部